

旧本庄商業銀行倉庫

－ 歴史的価値を尊重した保存再生活用の計画案 －

2012 年度

早稲田大学 旧本庄商業銀行倉庫保存活用プロジェクト

目次構成

0. はじめに	— 1
1. 建物概要	
1-1. 建物立地・敷地周辺状況	— 2
1-2. 建物の特徴－平面	— 3
1-3. 建物の特徴－断面・立面	— 4
2. 保存再生活用の方針	— 5
3. 企画設計の初期条件の設定	— 6
4. 施設用途の類例分析	
4-1. 類例分析①	— 7
4-2. 類例分析②	— 8
4-3. 類例分析③	— 9
5. 企画設計－3パターンの提示	
5-1. 企画設計 CASE1	— 10
5-2. 企画設計 CASE2	— 11
5-3. 企画設計 CASE3	— 12
6. 企画設計－最終案	
6-1. 企画設計3パタンの評価	— 13
6-2. 構造補強案について(1)	— 14
6-3. 構造補強案について(2)	— 15
6-4. 構造補強案について(3)	— 16
6-5. 最終案イメージ図	— 17

0. はじめに

本企画設計の目的

旧本庄商業銀行倉庫 - 歴史的価値を尊重した保存再生活用計画案 - では、第一期報告書における本倉庫の文化財としての評価及び、現状の構造評価をふまえ、建物の歴史的価値を十分に活かした建物の再生活用と構造補強の方法を提案する。

本企画設計の流れ

今回の企画設計は以下のような流れで行った。まず、建物の詳細実測調査や文献調査をもとに、旧本庄商業銀行倉庫における建物の歴史的価値の分析を行い、保存再生活用の方針を定めた。また、建物の活用方針と設計にあたっての面積条件など、企画設計における初期条件の設定を行った。

これら保存再生活用の方針・企画設計の初期条件に沿って、3つの企画設計案を提示する。そして3つの案に対して評価を行い、今回の企画設計において最良の案と思われるものを一案選定することとする。



1-1. 建物立地・敷地周辺環境

建物立地

旧本庄商業銀行倉庫は埼玉県本庄市内の旧中山道（現在の国道 392 号線）沿いに立地している。

旧中山道沿いには本倉庫をはじめとする歴史的建造物が多く残されており、また、その周辺には市の文化施設やJR本庄駅も立地している。



旧中山道側から見た旧本庄商業銀行倉庫

周 辺 地 域 の 歴 史

一 繭取引の街

官営富岡製糸場の設立に伴い、旧中山道が繭取引の拠点として設定され、明治 20 ～ 30 年代の本庄市は繭取引の町として栄えていた。明治 20 年代以降、器械生産の開始に伴う生糸の生産量の増大などを背景として、本庄商業銀行倉庫が建設された。



繭取引で栄えていた明治の中山道沿いの様子

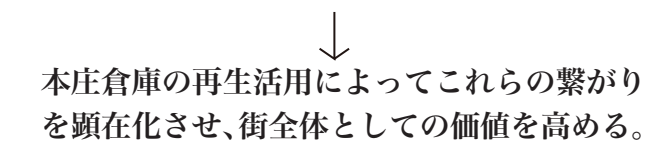
周辺地域に向けた今後の展望

－収蔵しきれていない文化財

現在本庄市には、多くの寄贈・収蔵文化財があるが、それら全てが現歴史民俗資料館に収蔵することができず市内に散在している。

一点在する歴史的建造物

旧中山道沿いには複数の歴史的建造物があるにも関わらず、関連づけられることなく点在している。

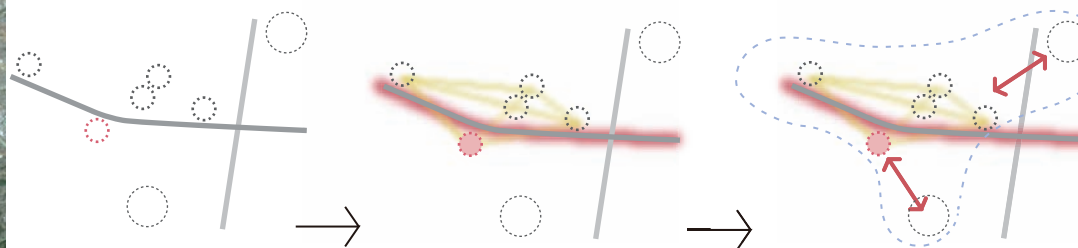


旧本庄商業銀行倉庫を中心とした新たなまちの繋がり

町の中に連関性がなく散在している歴史的建造物

旧中山道を軸とし、本庄煉瓦倉庫とそれらの関係性を高める

市民プラザなどの公共施設との
関連性も視野に入れた広域での
つながり方を検討する



旧中山道沿いに点在する 歴史的建造物



① 本庄赤煉瓦ホール (明治43年-) 卸酒屋であった「小森商店」の蔵を改修し、美術展やコンサートを行うホールとして利用されている。



② 本庄市立歴史民俗資料館 (明治16年)
元本庄警察署の擬洋風建物を、民俗資料を展示する資料館として活用している。県指定の有形文化財である。



③ 旧諸井家住宅 (明治12年)

諸井泉衛が横浜の洋館を手本に建築した。秩父セメントの創始者である諸井恒平の生家でもあり、県指定の有形文化財である。



④本庄仲町郵便局 (昭和9年 建て替え)
かつて諸井家が開設した郵便取扱所に始まり、現在の建物は昭和になって建て替えられたものである。現在も郵便局として機能している県の登録有形文化財である。

1-2 建物の特徴－平面

建物配置

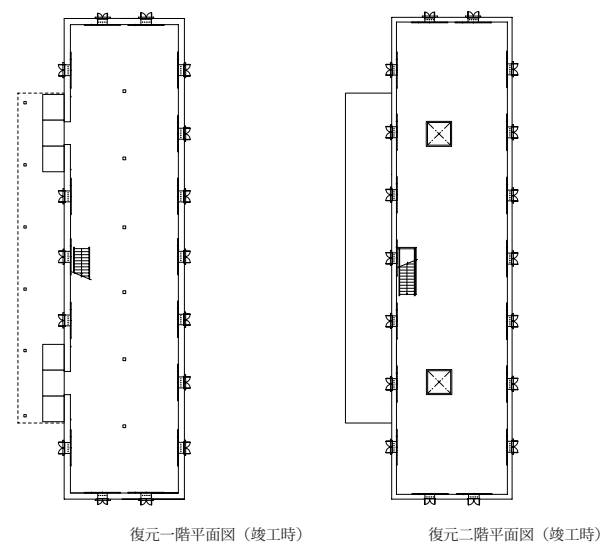
本倉庫は、旧中山道南側に面して立地する。倉庫西側にはもともと銀行の事務所棟が建てられていたが、昭和52年に取り壊され、現在は駐車場となっている。

また建物南側には土蔵が残されており、煉瓦倉庫との間には現在作業小屋が建てられ、両者を連結している。



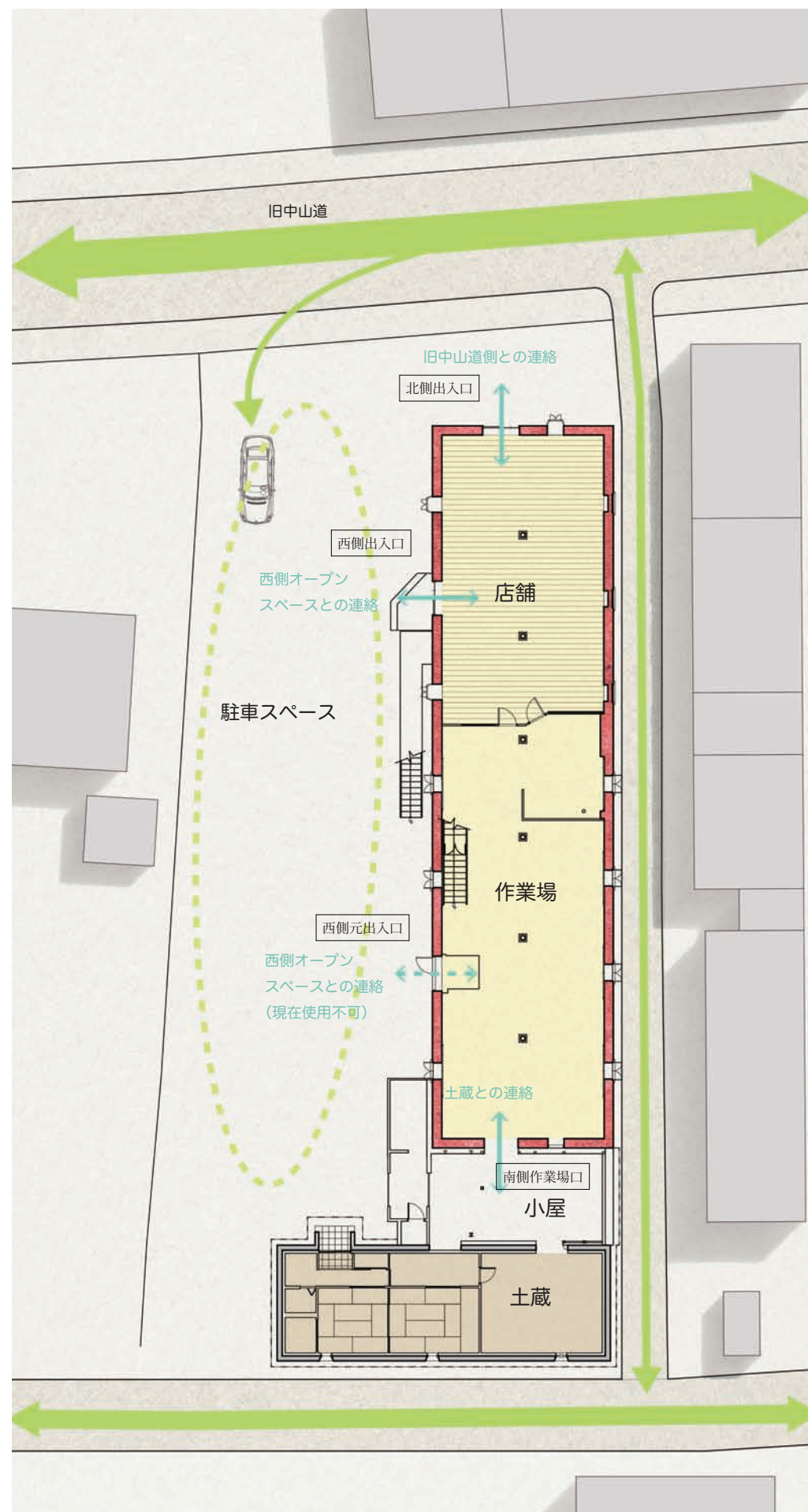
平面的特徴

建設当初の出入口は西側の2カ所である。現在ではこれに加え、旧中山道に向けられた北側妻面に一カ所、また土蔵との連結部分に繋がる南側妻面に一カ所設けられている。また、二階西側壁面中央部に、洋菓子店に用途変更する際に付加された避難階段が取り付けられている。



現状の構造的問題点

本倉庫は、我々の現状の構造評価から煉瓦壁体の妻方向の耐力が不足していたとした。そのため、本倉庫の歴史的価値を損なわない構造的補強方法を提案し、建物の価値を十分に活かす保存再生活用を考える。



建築概要

煉瓦造（床組・小屋組：木造）、2階建て、棧瓦葺き
 桁行 36.442m 梁間 9.110m
 建築面積 330.721m²
 延べ床面積（1階 288.239m² 2階 300.127m²）



二階平面図 S=1/300

一階平面図 S=1/300



0 1m 2m 4m 8m 16m



倉庫西側の駐車場



旧中山道側からみる煉瓦倉庫



洋菓子店への用途変更の際に西側に取り付けられた非常階段



土蔵南側外観



倉庫東側の私道

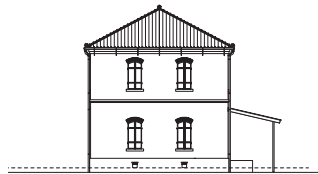
1-3. 建物の特徴—立面・断面

立面的特徴

本倉庫の西側にはかつて庇が架けられていた。また、繭の保管という機能上建物内の通気性を高める必要があるため、多くの開口部が一定の間隔で設けられている。それぞれの窓の外壁側には防火や防犯のための鉄扉を、内壁側には建物内部の細かな湿度調整のための建具がとりつけられており、これら繭蔵の機能に即した開口部のディテールはきわめて良好な状態で残っている。



復元西側立面図（竣工時）

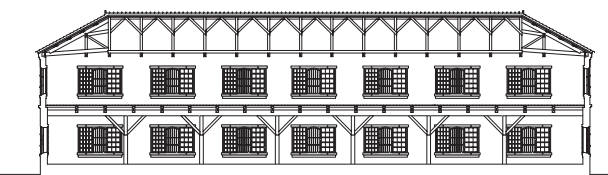


復元北側立面図（竣工時）

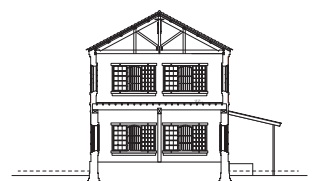
断面的特徴

繭蔵としての十分な天井高を確保するため、床から梁下までの高さは一階二階ともに3.2m。一階床は通気性を高めるために地面より600mmほど上げられていたが、後に当初の床板は取り払われ、現在は本来の床高さより低くなっている。

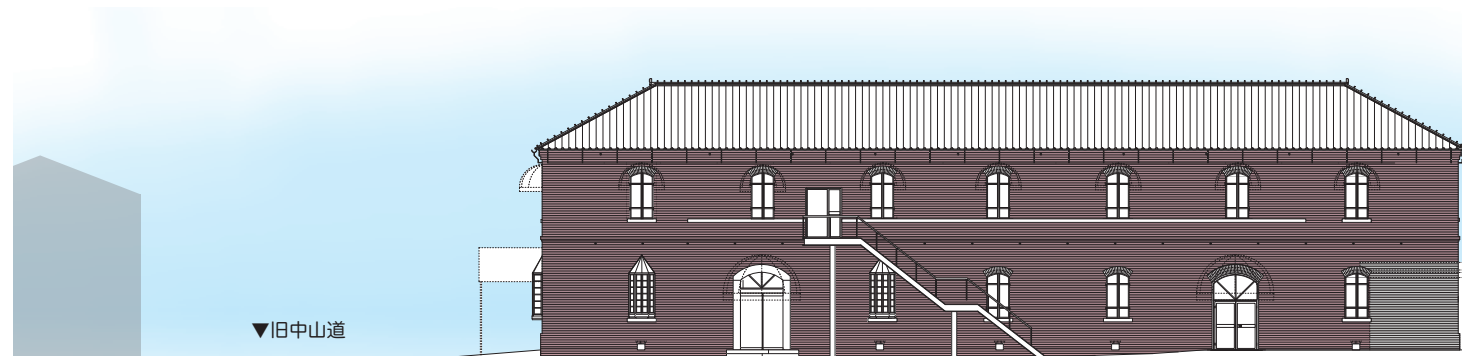
また小屋組は、当時の高い技術で組まれたキングポストトラスであり、現存状態も極めて良い。これにより二階は柱の無い大空間が確保されている。



復元長手断面図（竣工時）



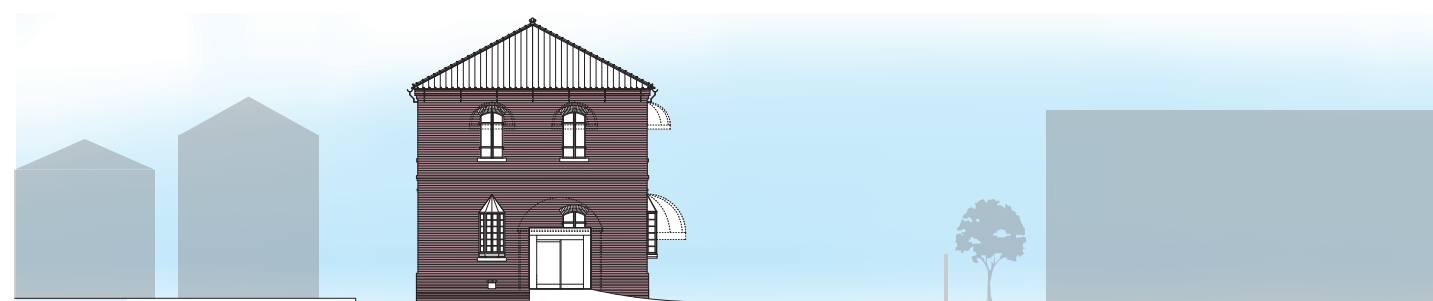
復元短手断面図（竣工時）



西側立面図 S=1/300



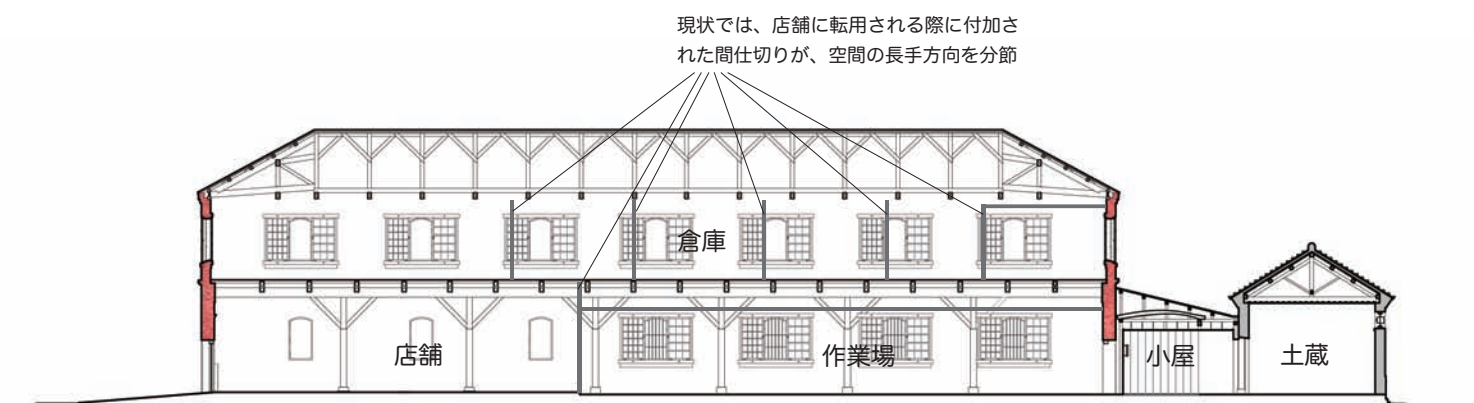
西側外観



北側立面図 S=1/300



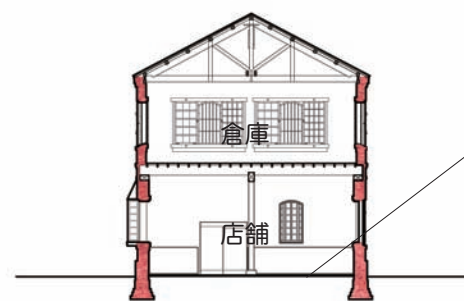
開口部の建具



長手断面図 S=1/300



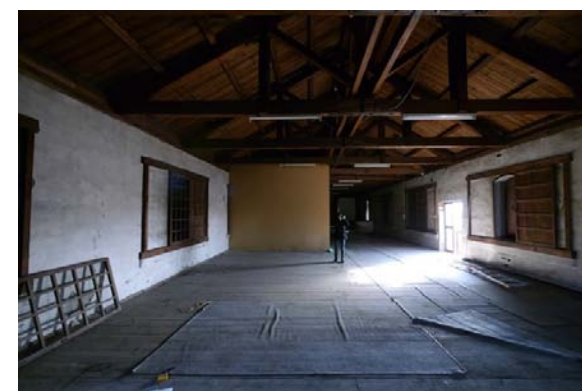
キングポストトラス



短手断面図 S=1/300

一階の当初の床板は外されており、現在は店舗部分はフローリング張り、作業場部分はRC打設

0 1m 2m 4m 8m 16m



二階の無柱空間

2. 旧本庄商業銀行倉庫の 保存再生活用のための方針

建築的評価による保存活用の方針の設定

前述の通り本倉庫は、明治期のエンジニアによる技術が集約された、極めて合理的な煉瓦造の倉庫である。またそのような本倉庫が持つ建築的特性が、歴史の過程の中で様々な用途転用がなされながらも、現在に至るまで健全な状態で残っている。

本倉庫の保存再生活用に関する3つの方針を定める。
まず、本倉庫に備わる建築的特性を空間・構造・設備の観点からそれぞれ評価を行い、今日においてもなお尊重すべき特性を抽出する。そして、空間・構造・設備のそれぞれが交わる観点から、尊重すべき特性を十分に活かすための3つの方針を定める。

1 無柱空間を活かす

構造 空間

キングポストトラスによって生まれる無柱空間を大事にし、将来的な運用・変化への空間的対応に耐える改修を行なう。

2 空気の流れを活かす

空間 設備

蔵の機能による優れた通気計画を大事にする。既存の一定のリズムで設けられた開口部・建具を有効に活用する。

3 復元可能な可逆性を持つ

設備 構造

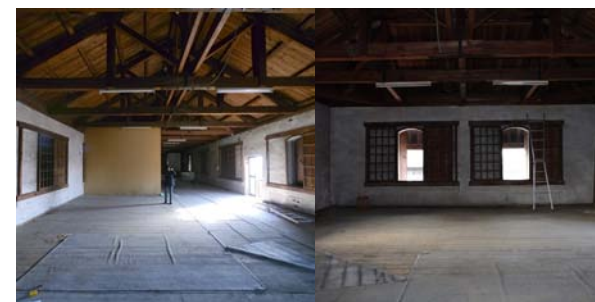
建物の用途を更新する際に、新たに挿入するシステムは最小限でシンプルなものとする。

本倉庫に備わる建築的特性の評価



構造的評価

- 状態の良い煉瓦壁体
- 建設当時の高い技術で組まれた、極めて状態の良いキングポストトラス
- ▲ 煉瓦壁体の妻方向の耐力の不足



空間的評価

- 極めて利用性の高い二階の無柱の大空間
- 倉庫特有の奥行きのある均質な空間
- ▲ 店舗として利用される際に付加された、倉庫の長手方向の空間を分断する間仕切り壁



設備的評価

- 優れた換気能力を持つ開口部
- 耐火に有効な煉瓦壁体

保存活用の方針の設定

本倉庫における普遍的価値を生かした保存活用の方針

1 無柱空間を活かす

空間

二階の無柱の大空間
奥行きのある均質な空間
将来的な運用・変化への空間的対応

2 空気の流れを活かす

構造

状態の良い煉瓦壁体
状態の良いキングポストトラス

設備 (防災・設備)

機能的な開口部・建具
煉瓦壁の耐火性

復元可能な可逆性を持つ

3. 設計初期条件の設定

活用方針の設定

－まちに開かれた歴史民俗資料館としての保存活用

現本庄市歴史民俗資料館では収蔵しきれずに市内に散在している数多くの貴重な美術・歴史民俗資料を、本倉庫に移設し保管・展示する。

また、中山道に面する本煉瓦倉庫は、これまでも市民たちに長く親しまれ、まちのシンボルとなるようなポテンシャルを持っている。資料館機能とは別の公共機能を設けることで、本倉庫が本庄市における文化と市民交流の中心地となることを期待する。

本庄市歴史民俗資料館について



本庄市歴史民俗資料館所蔵『笑う埴輪』

－主な収蔵品

中山道本庄宿の資料のほか、本庄市の名家である諸井家の資料などが展示されている。なかでも現資料館に収蔵されている「笑う埴輪」は本庄市を代表する文化財である。

－現資料館の諸室および面積

展示室：139㎡

収蔵庫：18㎡

管理室・学芸員室・準備室：41㎡

その他（廊下・バルコニー等）：17㎡

面積条件の設定

－必要諸室面積

現資料館展示室＋収蔵庫面積の約2倍の300㎡を資料館スペースの最低面積として確保する。また本倉庫と延べ床面積の近い資料館事例を参照し、必要な管理・事務スペースを100㎡程度とした。

－新設のオープンスペース

残る面積(300㎡程度)を新たに付加される公共スペースとする。資料館スペースと新たに付加するオープンスペースの割合を変化させて面積設定をおこない、3つのパターンを設定する。

本倉庫の活用方針

本庄市の文化資料

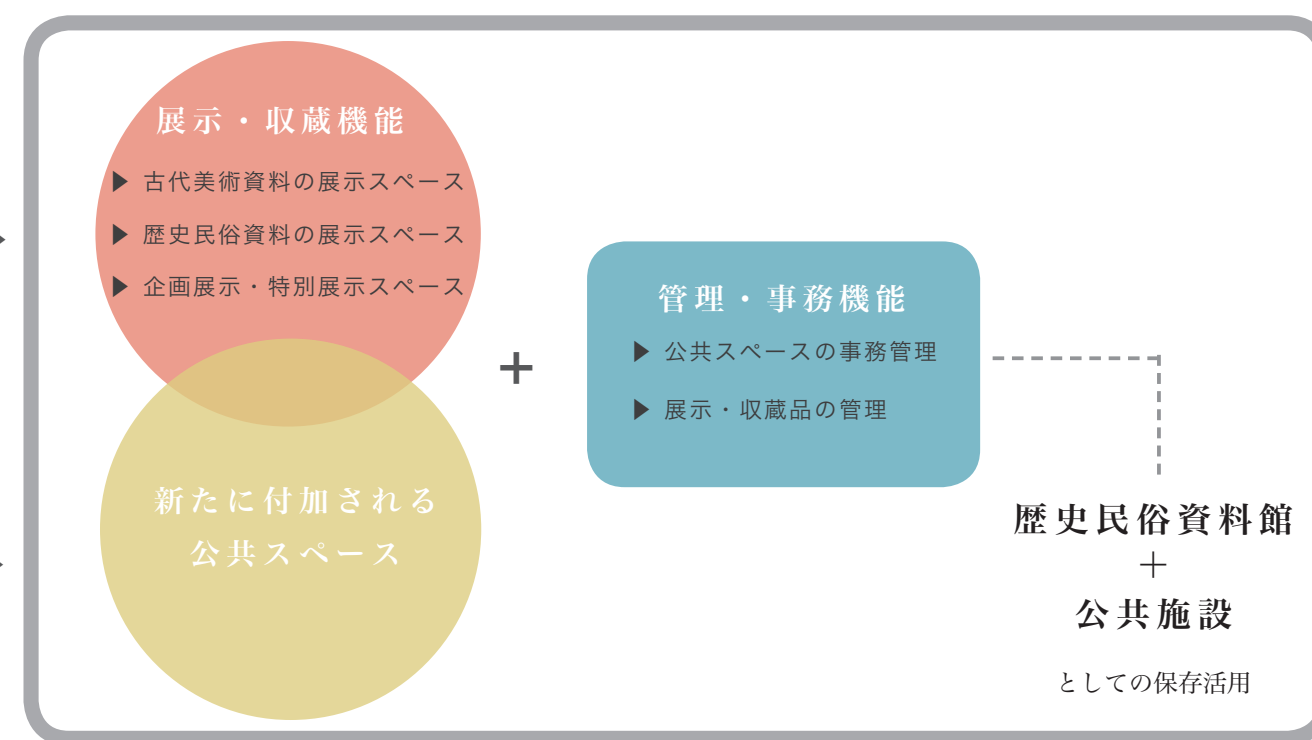


- ・現資料館に展示されている貴重な古代美術資料
- ・市内で分散管理されている歴史民族資料

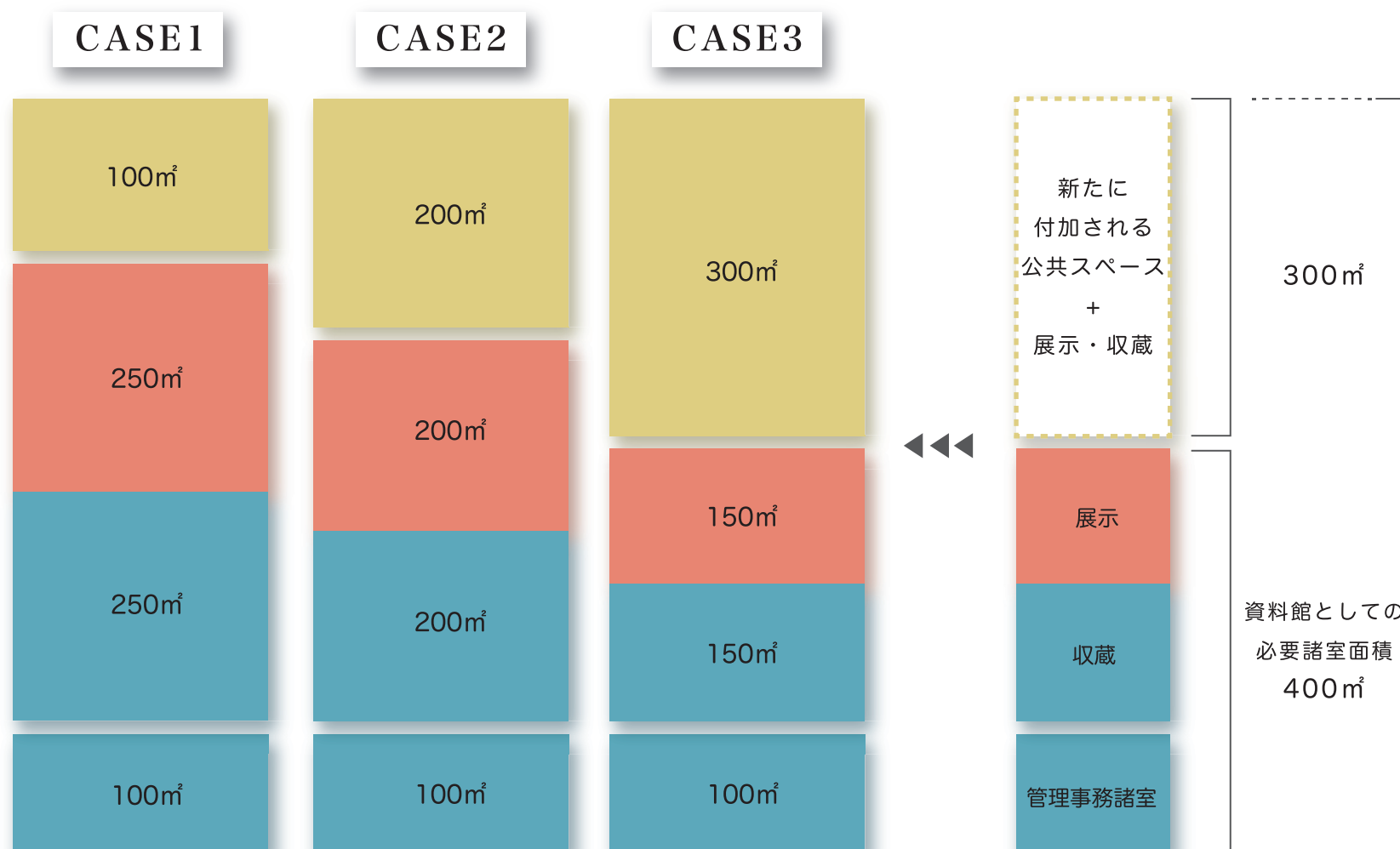
市民に親しまれた煉瓦倉庫



- ・市民の交流の拠点となる立地
- ・市のシンボルとしての文化的建造



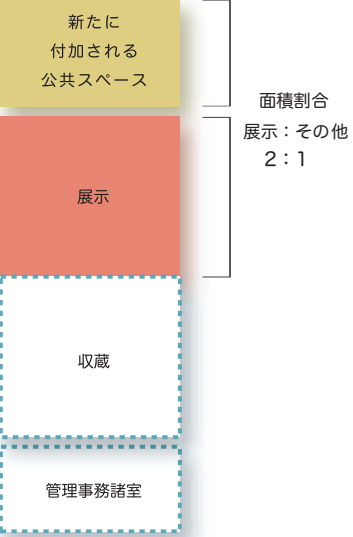
諸室面積割合の3パターン



煉瓦造 + 土蔵
700㎡

資料館としての
必要諸室面積
400㎡

4-1. 類例分析①



管理事務・収蔵以外の用途部分において、展示スペースがその約2/3を占める事例を取り上げる。特に展示形態や展示空間に着目し、提案CASE1への展望を示す。

分析

― 展示空間のあり方の多様性

ここで取り上げた3つの事例においては、収蔵室を閉鎖的なものとせず、展示室同様に一般に開けたものとして計画されている。収蔵機能をオープンなものとして計画することによって、施設全体が一般に開けたものになっていると考えられる。また、展示空間面積が大きくなる分、展示空間の用途の可能性も広がる。

諸室配置のダイアグラム ▶

展示室のほかに収蔵機能を兼ねた展示室も考えられる。



計画への展望

― 開けた収蔵室

本庄市における歴史民俗資料の保管の問題解決と展示空間の増設を一体として考えることができる。

― 多彩な展示企画

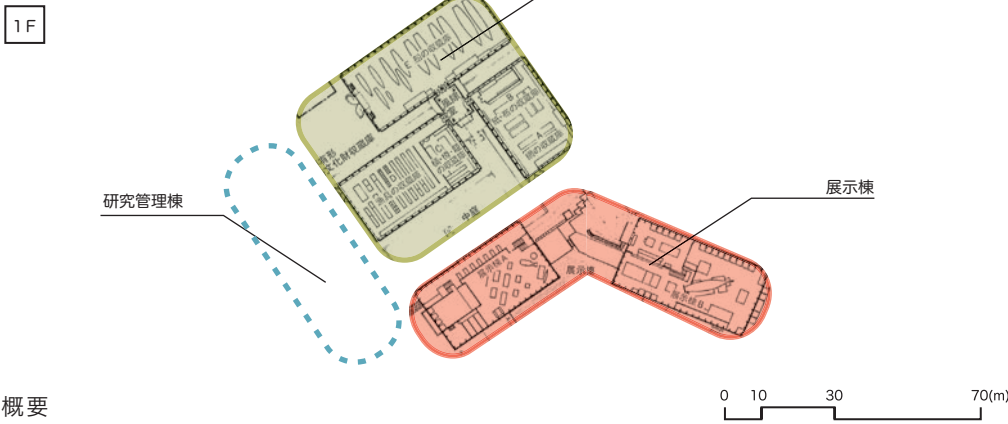
いくつかのテーマ毎に展示スペースを設けたり、展示品の価値や種類に応じて展示・保管形態を区分していくことが可能。

類例－① 海の博物館



基本情報	竣工年	：1992 年	敷地面積	：18,058 m ²
	設計者	：内藤廣建築設計事務所	建築面積	：4,016 m ²
	用途	：博物館	延床面積	：4,424 m ²
	所在地	：三重県鳥羽市	構造	：PC 工法、木造、一部 RC 造

Diagram



概要

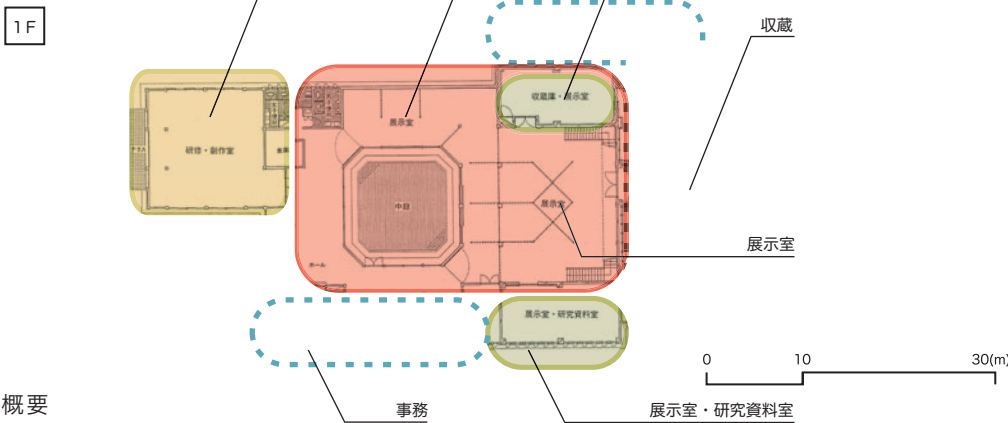
研究管理棟、収蔵庫、展示棟をそれぞれ別館とし、外部空間や風除湿で繋いでいる。収蔵庫は資料の保管・管理に重点を置きながらも、展示棟と同様に一般公開している。

類例－② 五十崎凧博物館



基本情報	竣工年	：1989 年	敷地面積	：3,460 m ²
	設計者	：早川正夫建築設計事務所	建築面積	：1,157 m ²
	用途	：博物館	延床面積	：1,119.55 m ²
	所在地	：愛媛県喜多郡	構造	：木造、一部 RC 造

Diagram



概要

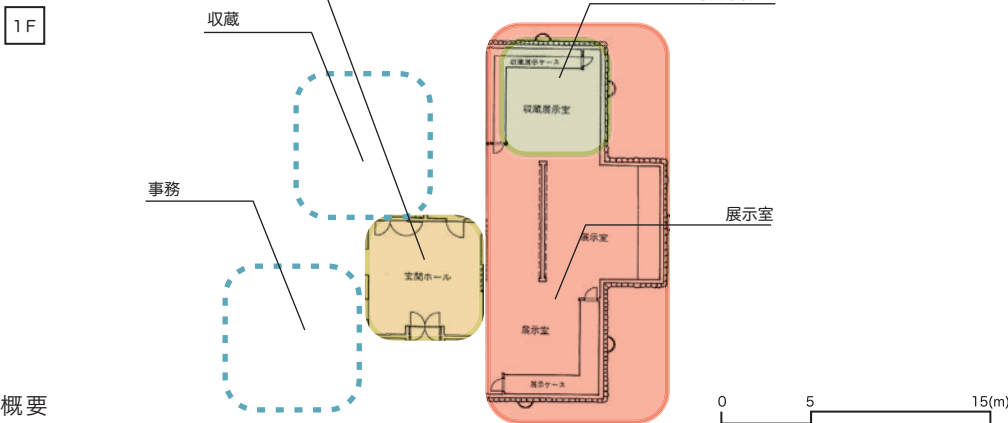
一般的な展示室の他に収蔵機能を兼ねた展示室を設けている。中央のホールを中心に各所室に接続する配置計画となっている。

類例－③ 里庄町歴史民俗資料館



基本情報	竣工年	：1980 年	敷地面積	：4,765 m ²
	設計者	：矢吹昭良建築設計事務所	建築面積	：356.51 m ²
	用途	：資料館	延床面積	：348.81 m ²
	所在地	：岡山県浅口郡	構造	：RC 造

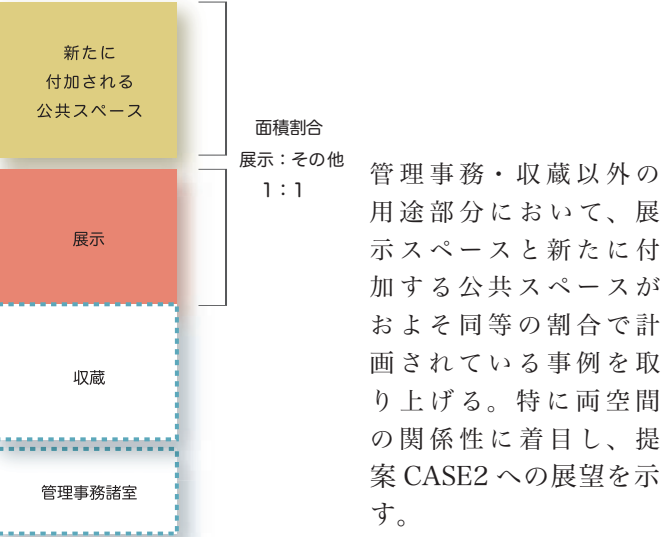
Diagram



概要

展示空間の一部に収蔵展示室を設けている。また、それとは別途に収蔵庫も設けている。類例②と同様に中央の玄関ホールから各諸室に接続する配置計画としている。

4-2. 類例分析②



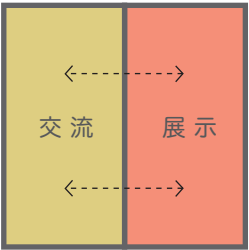
分析

― 静と動の空間の均衡

上記の例では、まず入口に大きなホール空間が設けられ、そこから展示スペースと交流スペースに二分されたゾーニングである傾向が高い。目的に応じた利用が可能である。また、両者の空間に回遊性を持たせる事で、展示スペースと交流スペースの機能が密接に関連した、より有機的で多様な空間体験も可能となる。

諸室配置のダイアグラム ▶

二分された交流と展示スペースが
交互に関係性をもつ。



計画への展望

― 回遊的な動線計画

均質な平面・断面構成をしている本倉庫においては、動線が単一方向になる可能性が高いが、そうではない動線計画を検討することも可能であると考えられる。

― 展示と交流の関連性の向上

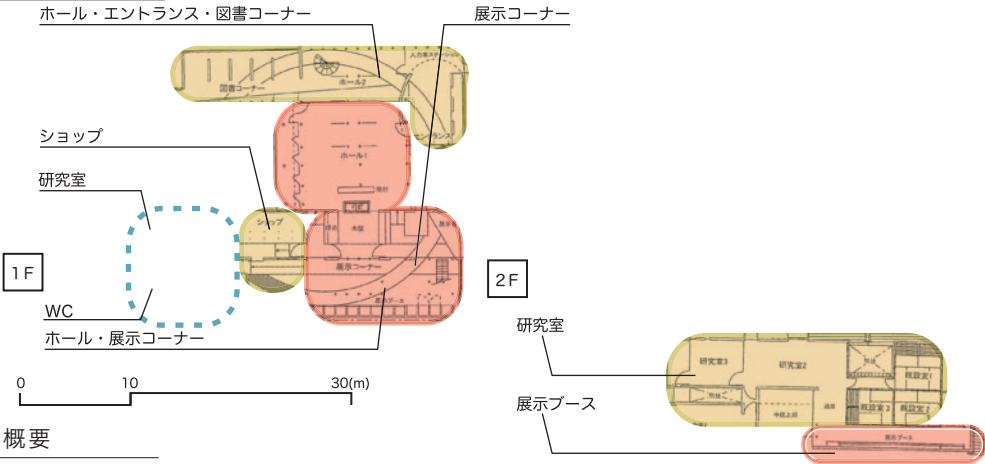
展示内容と関係性の高い交流スペースの機能の提案が可能。

類例－① 上下町歴史文化資料館



基本 情報	竣工年	：2003 年	敷地面積	：1,382m ²
	設計者	：斎藤正／近畿大学澤戸研究室	建築面積	：429m ²
	用途	：資料館	延床面積	：712m ²
	所在地	：広島県府中市	構造	：木造

Diagram



概要

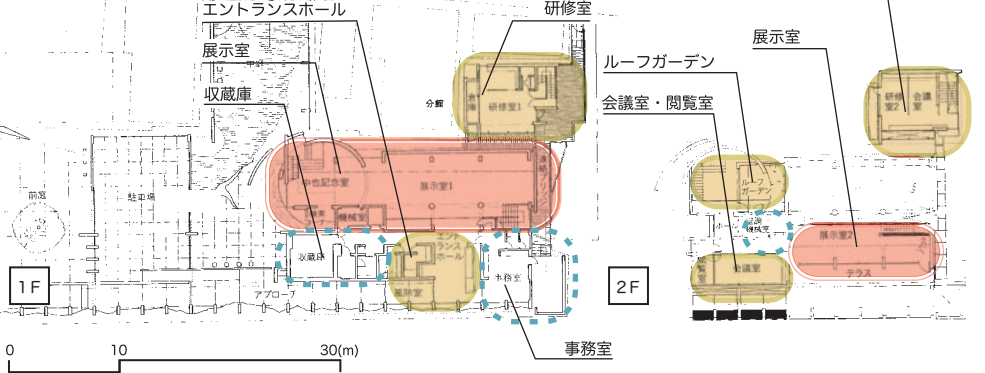
入口に接する正方形の大きなホールを中心として交流施設、展示施設が同等の割合で計画されている。また、これらをつなぐスロープやブリッジが建物全体の回遊性が高めている。

類例－② 中原中也記念館・分館



基本 情報	竣工年	：1993 年	敷地面積	：1,663m ²
	設計者	：宮崎浩／プランツアソシエイツ	建築面積	：369m ²
	用途	：記念館	延床面積	：499m ²
	所在地	：山口県山口市	構造	：鉄筋コンクリート造

Diagram



概要

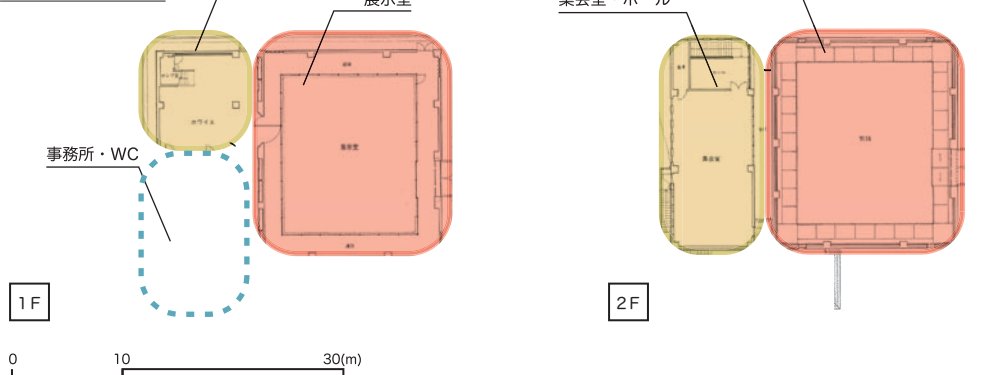
建物内部空間と外部空間との繋がりがよく意識され計画された建物である。内部は展示室を中心に、その他研修室や会議室などが周りに配置されている。

類例－③ 城端曳山会館



基本 情報	竣工年	：1982 年	敷地面積	：1,463m ²
	設計者	：五井建築設計研究所	建築面積	：658m ²
	用途	：展示館	延床面積	：760m ²
	所在地	：富山県南砺市	構造	：鉄筋コンクリート造、一部 SRC 造

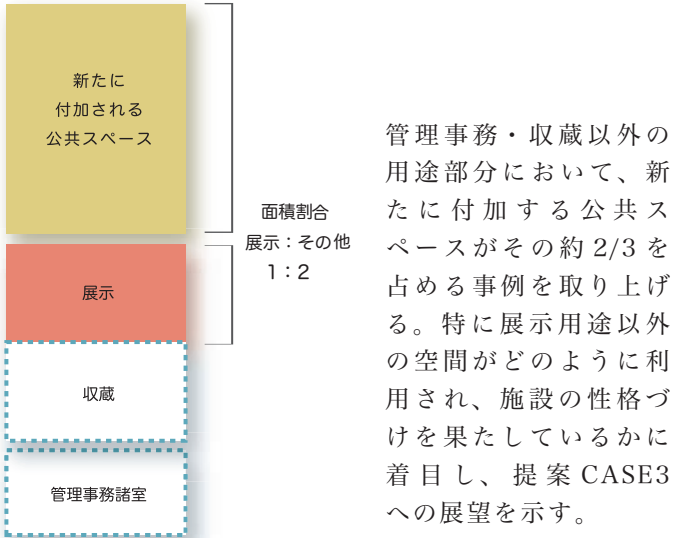
Diagram



概要

主室となる曳山の展示室を、防災・室内環境干渉排除の点からその他の諸室から分離して設けている。集会スペースとしてのホワイエ、ホール、集会室は南側にまとめて配置されている。

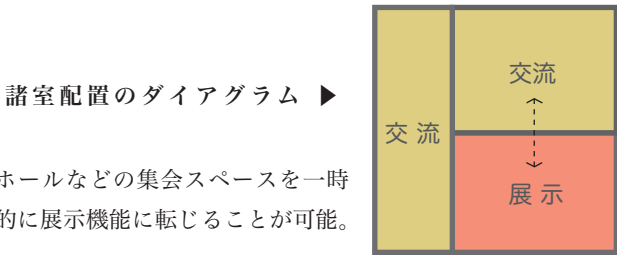
4-3. 類例分析③



分析

― にぎやかな交流スペースの中の
静かな展示室

にぎやかで、多様な活動が営まれる空間の中で、展示空間は落ち着いた静の空間として特徴を持つ。また、交流スペースの面積が増えるにつれ、多目的ホールのほか、工房や図書館といった機能が明確な諸室が増える。多目的ホールが展示機能の一部を補うような例も見られた。



計画への展望

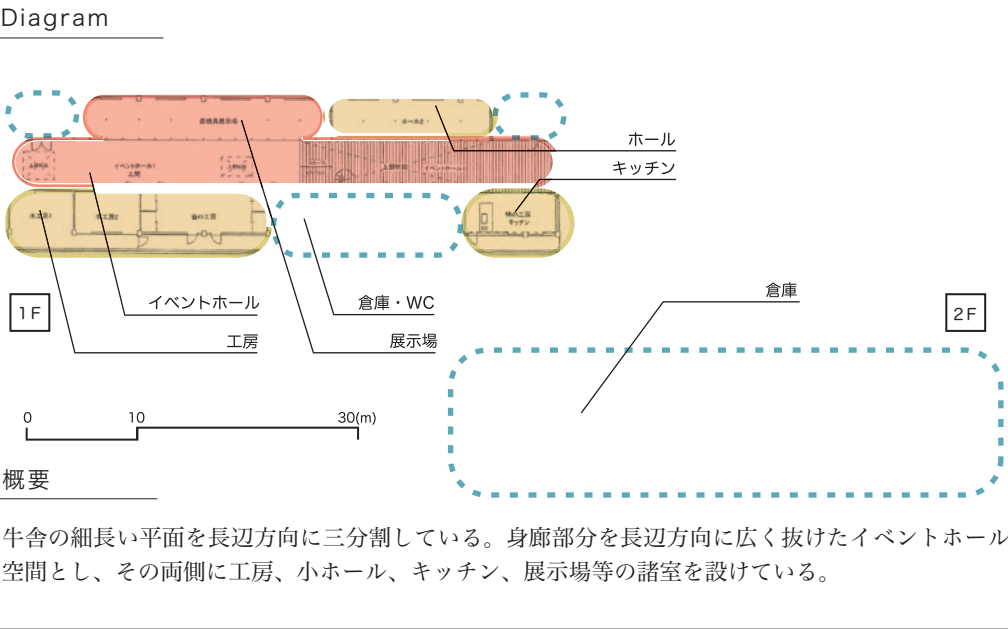
― 市民交流の中心地

均質な平面・断面構成をしている本倉庫においては、長辺方向や上下階でゾーンを分節することが可能。これにより、空間の性質がはっきりと分かれ、目的に応じた利用が明確となる。

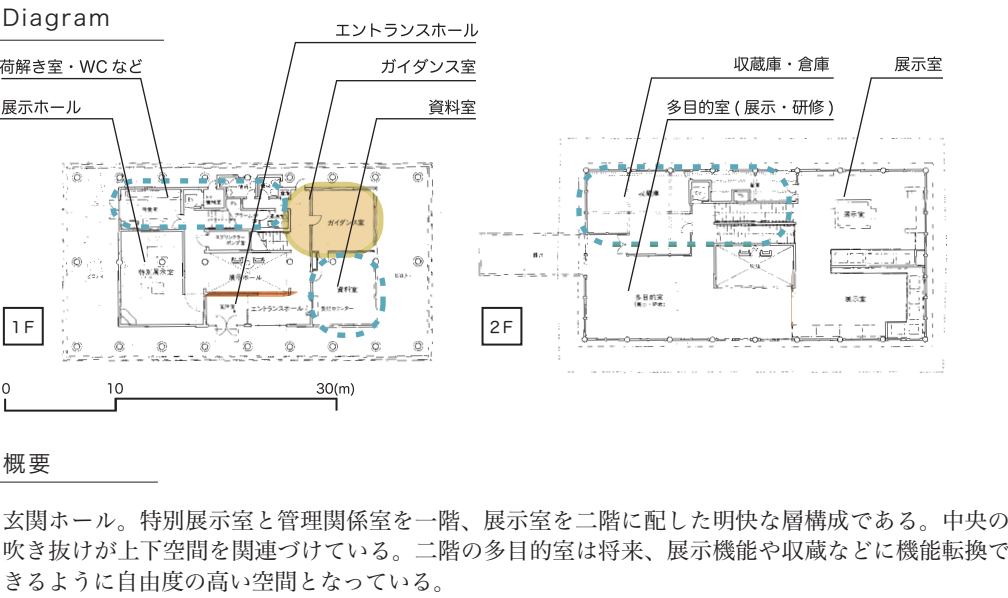
― 多様な市民活動の場

創作、読書、イベントといった多様な文化的活動が可能となる。

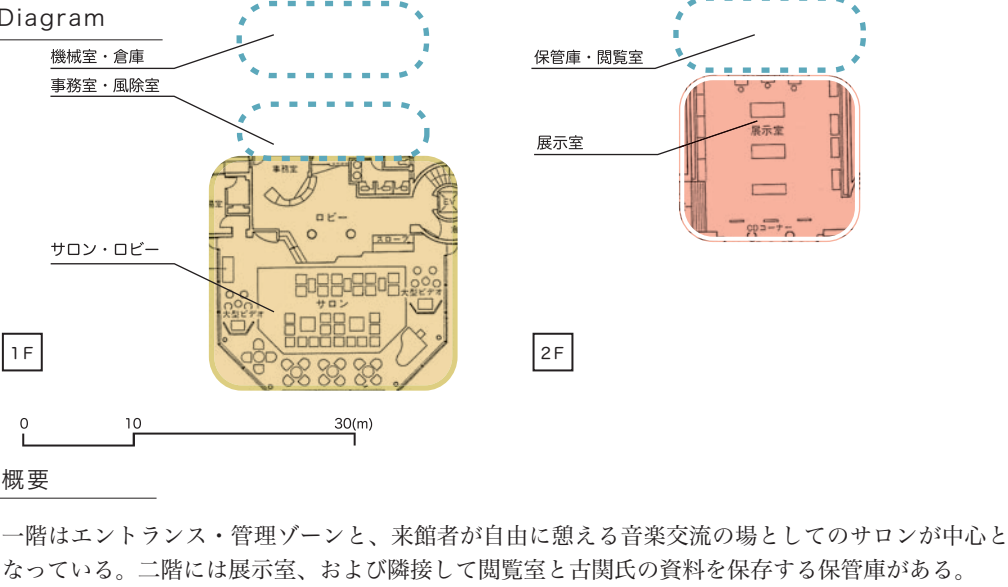
類例－① 奥備中風土記館



類例－② 松 盧 館

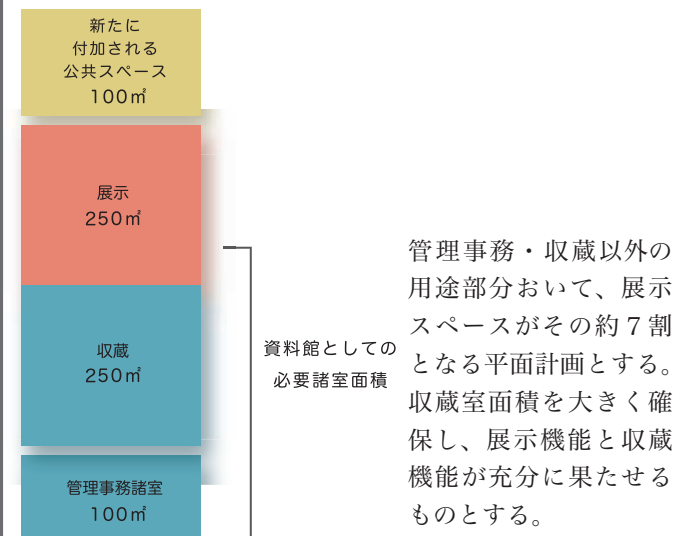


類例－③ 古 関 裕 而 記 念 館



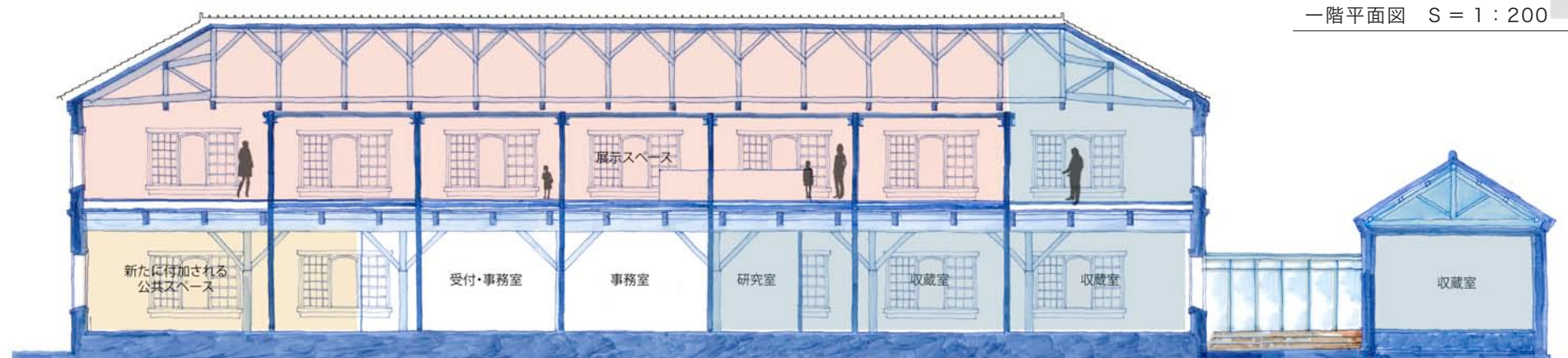
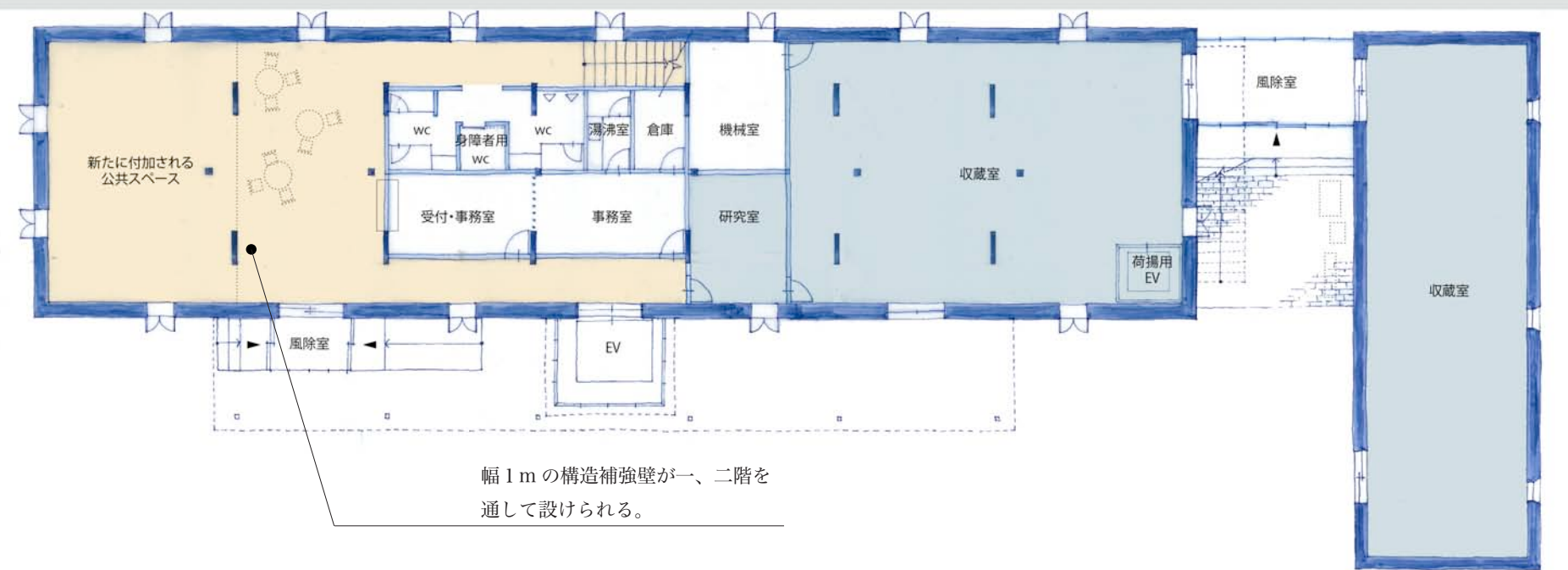
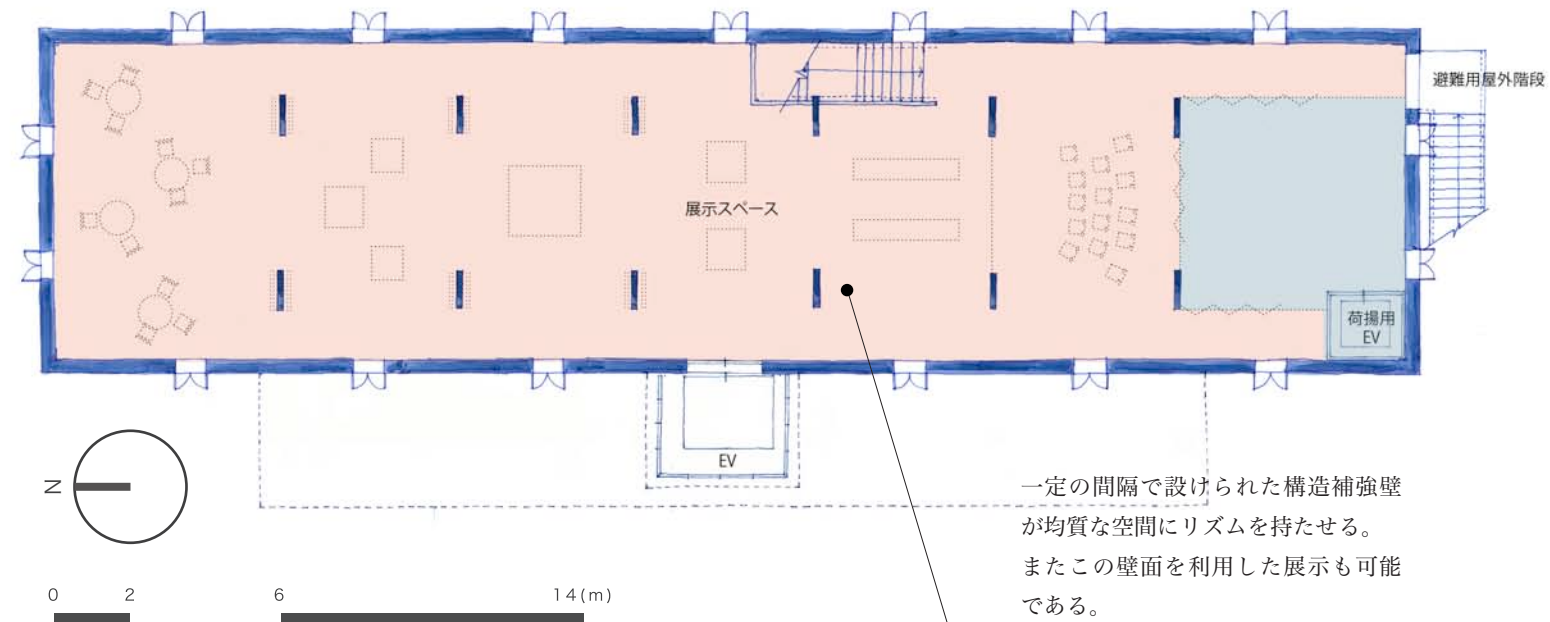
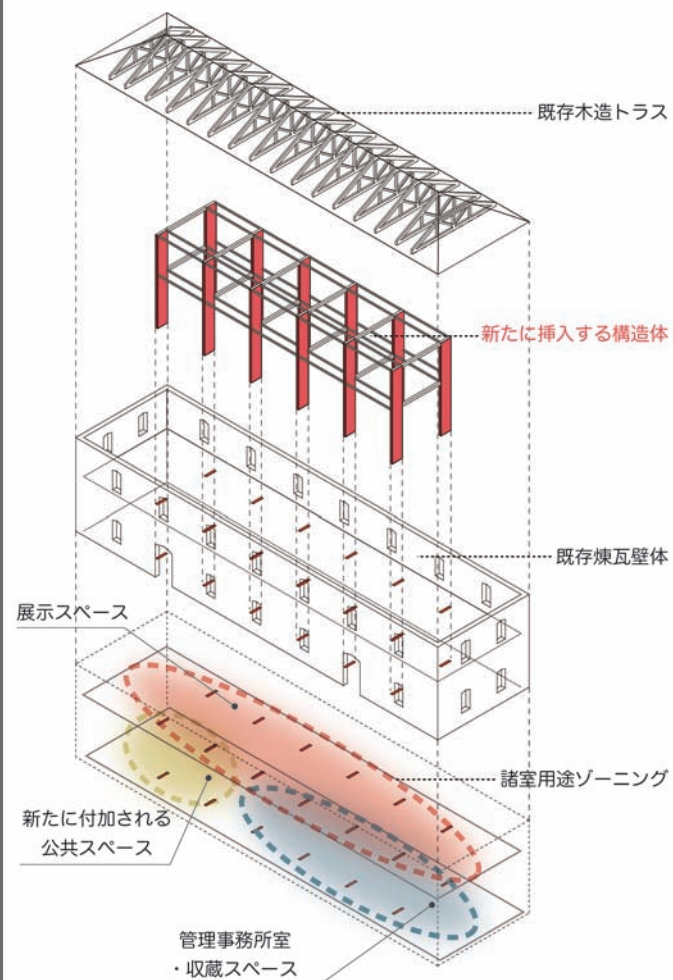
5-1. 企画設計 CASE 1

提案概要



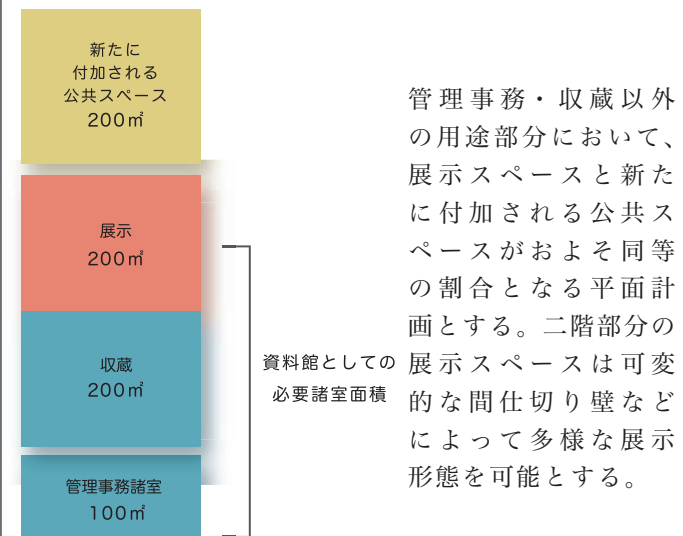
構造補強のイメージ

— 新たに挿入される構造体が均質な空間を担保しながら、空間にリズムを持たせる



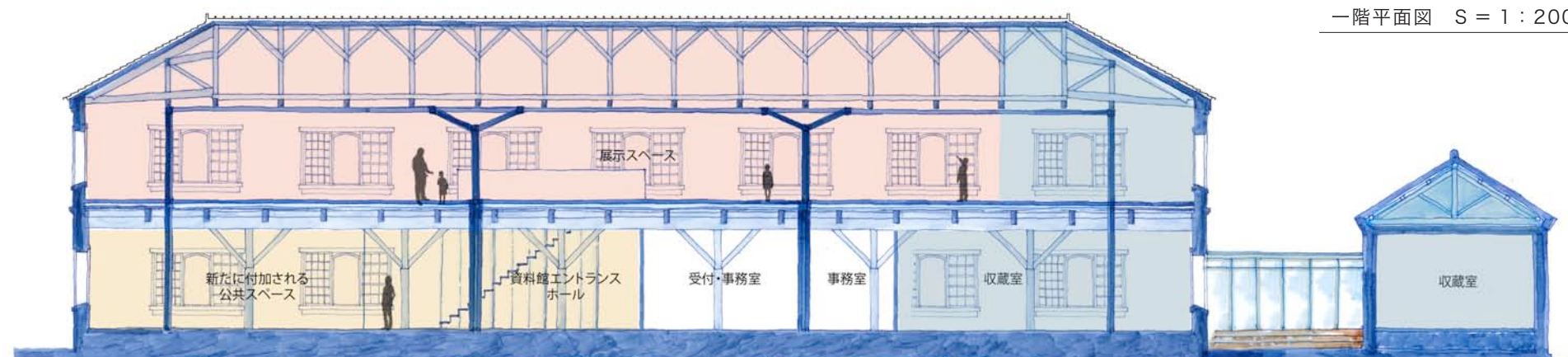
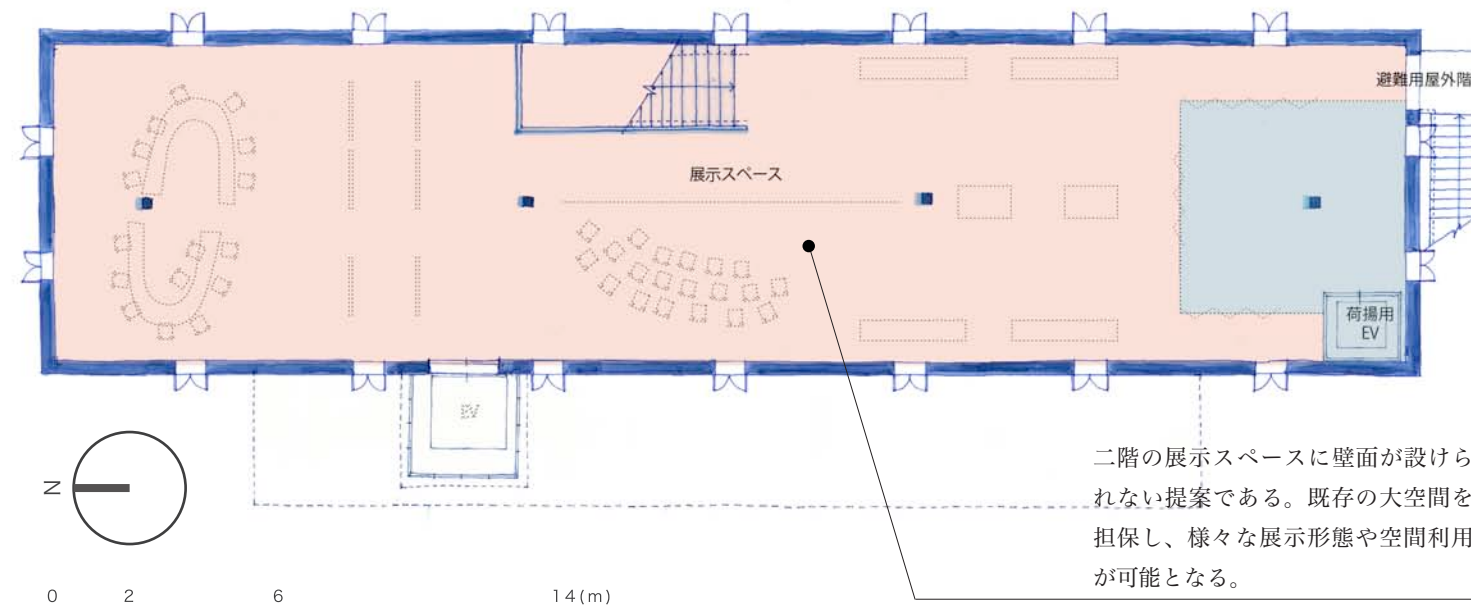
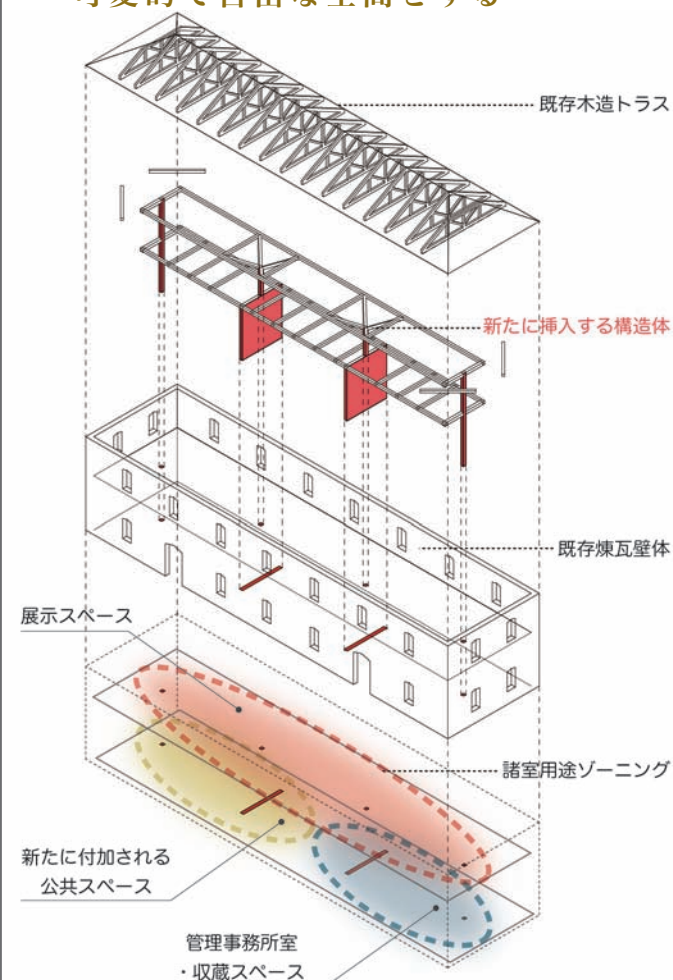
5-2. 企画設計 CASE2

提案概要



構造補強のイメージ

- 新たに挿入される構造体は、二階部分に壁を設けないことによって可変的で自由な空間とする



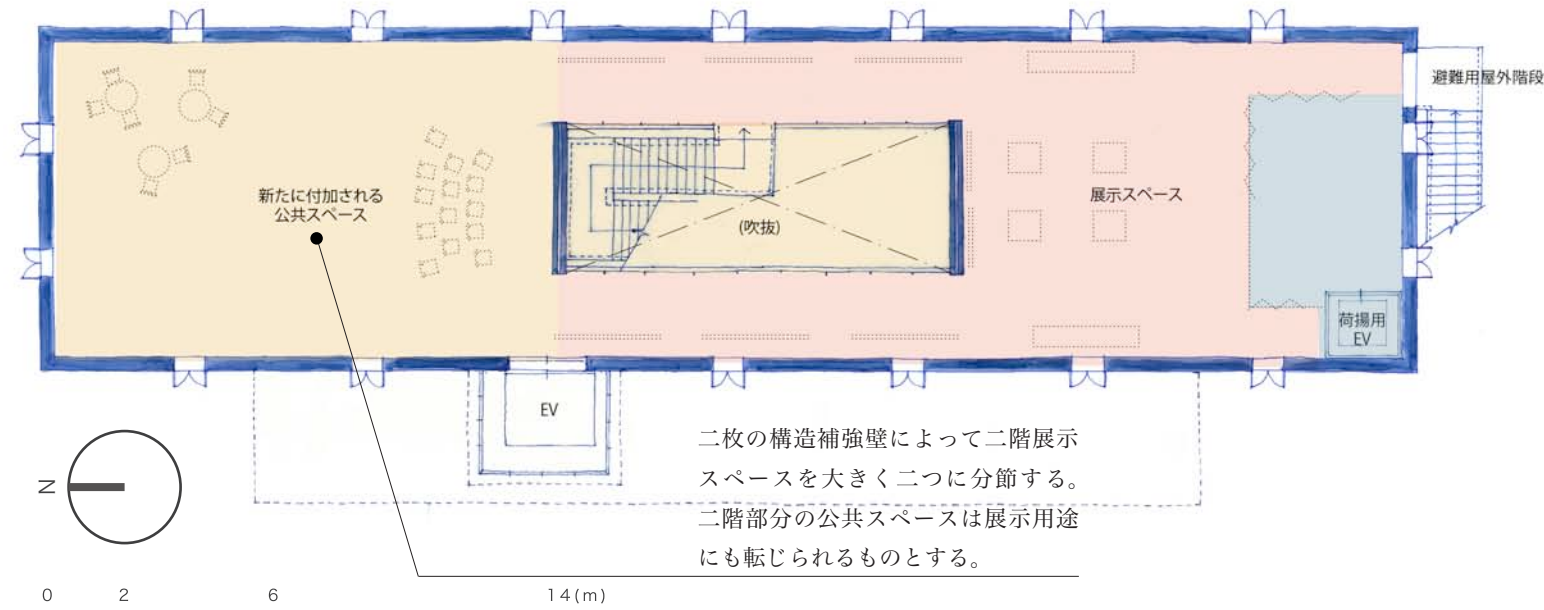
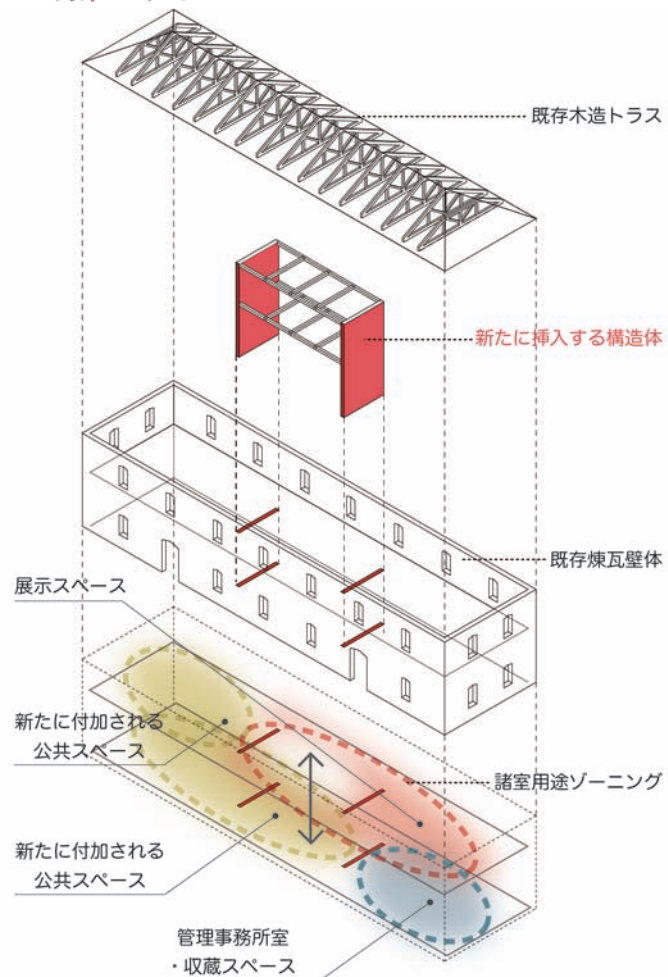
5-3. 企画設計 CASE3

提案概要

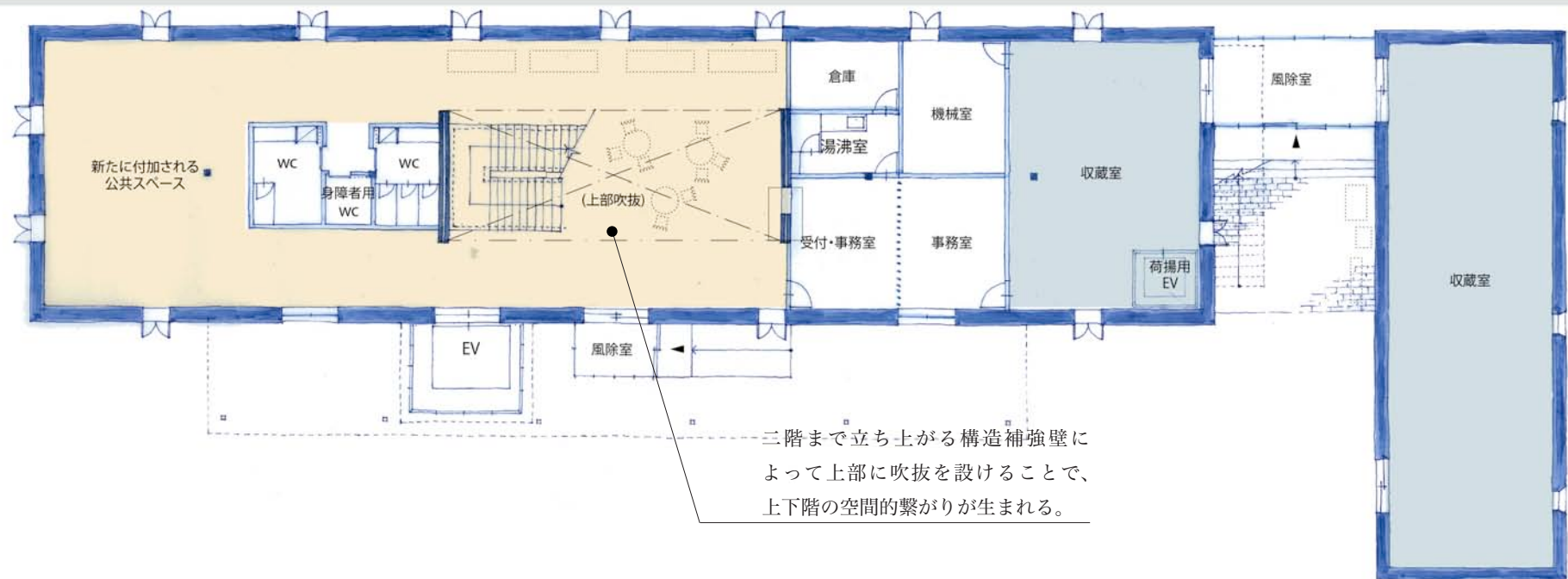


構造補強のイメージ

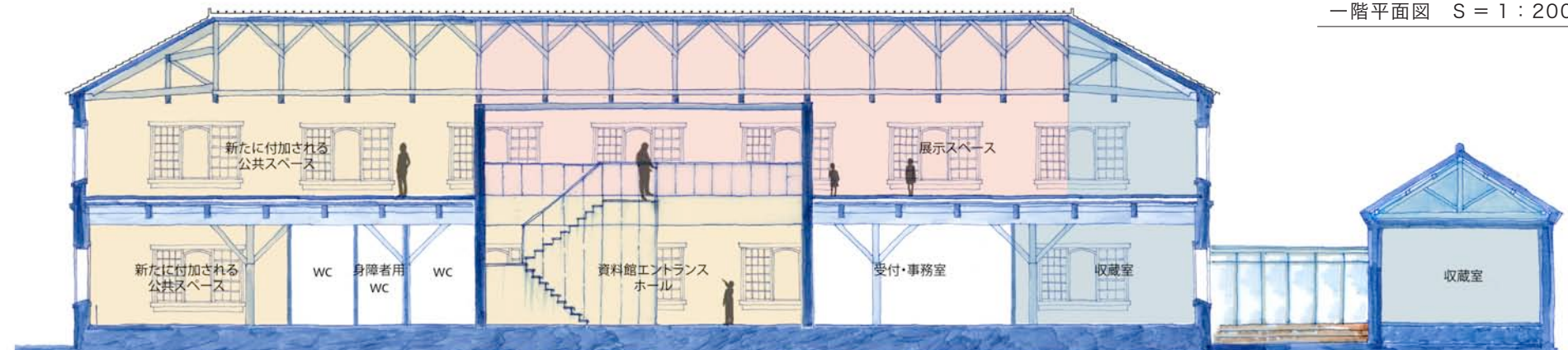
— 新たに挿入される構造体が、機能に応じた空間のゾーン分けを明確にする



二階平面図 S = 1 : 200



一階平面図 S = 1 : 200

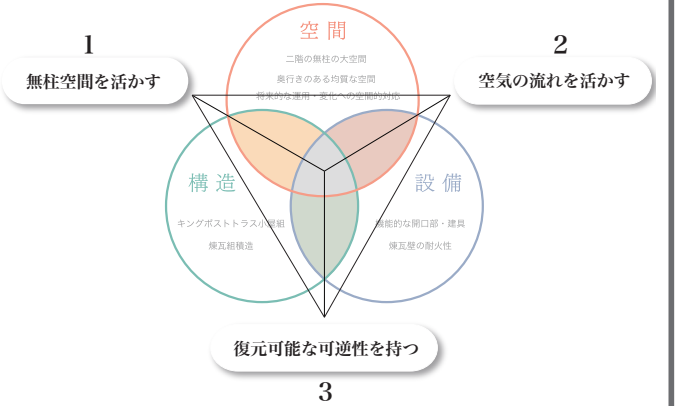


長手断面図 S = 1 : 200

6-1. 企画設計 3 パタンの評価

保存活用の方針から見る 3 ケースの評価

本倉庫の保存再生活用の基本方針で挙げられた、空間・構造・設備に関わる三原則を評価の視点とし、企画設計の3パターンそれぞれを評価する。



最良案の選定

評価の結果、CASE 2 が最も本倉庫の建築的特質を活かした提案であると言える。また、CASE 2 で取られている構造補強方法は、二階のトラス大空間を出来る限り分節しない方法をとっており、今後の倉庫の活用を考えていく上で最もフレキシブルな対応が可能である。以上の理由から、CASE 2 は今回の企画設計において最良の案であると考えられる。

三原則及び評価	CASE ①		CASE ②		CASE ③	
1. 無柱空間を生かす	○	一、二階に大きな壁面が入らず、空間を大きく分節することはない。	◎	二階には壁面が入らず、キングポストトラス大空間を十分に活かした利用が可能。	△	大きな壁面が一、二階共に挿入され、空間を分節する。また、応力が建物の長手中央部に集中する。
2. 空気の流れを生かす	○	既存の開口部を塞ぐことなく、優れた換気システムとして活用する。	○	既存の開口部を塞ぐことなく、優れた換気システムとして活用する。	○	既存の開口部を塞ぐことなく、優れた換気システムとして活用する。
3. 復元可能な可逆性を持つ	△	構造補強壁面が数多く挿入されるため、建物全体として過度なシステムの挿入となる。	◎	構造補強を木造軸部全体にバランスよく行なうことで各部分へのシステムの付加を軽減し、復元可能性を高める。	○	付加するシステムは単純であるが、構造補強が建物長手中央に集中するため、局所的に大きな構造材が挿入される。
総合評価		長手方向の空間の抜けと均質性を保つが、過度なシステムの挿入となる。		新たなシステムの挿入を全体にバランスよく行なう。トラスによる無柱空間を最大限に利用するため、フレキシブルな空間利用が可能。		空間を長手方向に分節する。挿入するシステムとしては3パターンの中で最も単純である。

6-2. 構造補強案 (1)

構造補強の方針

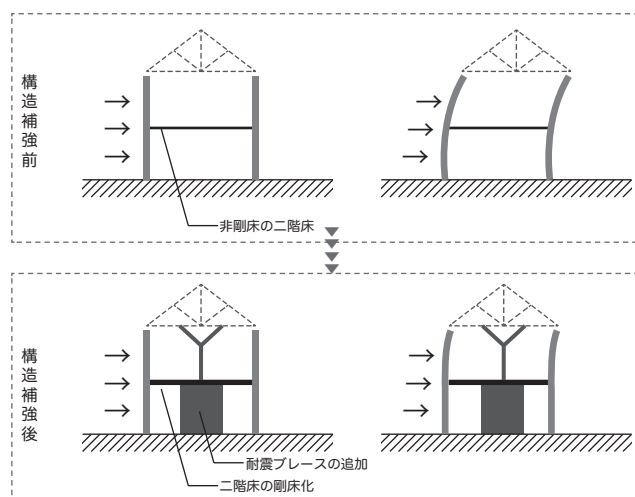
意匠設計の方針に倣い、今後の種々の用途にも広く対応可能な形式として、適切かつ最小限の構造設計を行う。またコンクリート等の材料を用いないリバーシブルな補強方法となるよう、木造部との取り扱いにおいて配慮した。建築基準法の耐震基準を満たすことを目的に耐震性を付与するが、規定の $C_0=0.2$ の 1.5 倍の $C_0=0.3$ の地震力にも耐えうるものとした。

ただし、数百年に一度程度起こることが想定される、極稀に起こる地震に対しては、煉瓦壁の剥落、崩落が起こる可能性を有しているが、床・屋根の倒壊を防ぐことを担う形式をしていることから、極稀に起こる地震が生じた場合でも、地震後に補修程度で修復されることが期待される。

構造補強の方法

現状の構造評価の分析結果に基づき、長手構面の隣接壁間距離が長いこと及び剛床性の不足に対して、効果的な補強方法となるよう配慮した。

今回の提案では、煉瓦壁の地震力を新たに付与する鉄骨フレームで負担し耐震性を付与するが、その際、既存の木造の梁の性能に期待し、煉瓦壁の地震力を木造梁を介して鉄骨フレームに伝達する提案とした。



鉄骨フレームによる構造補強モデル



図1 構造補強部材のモデル

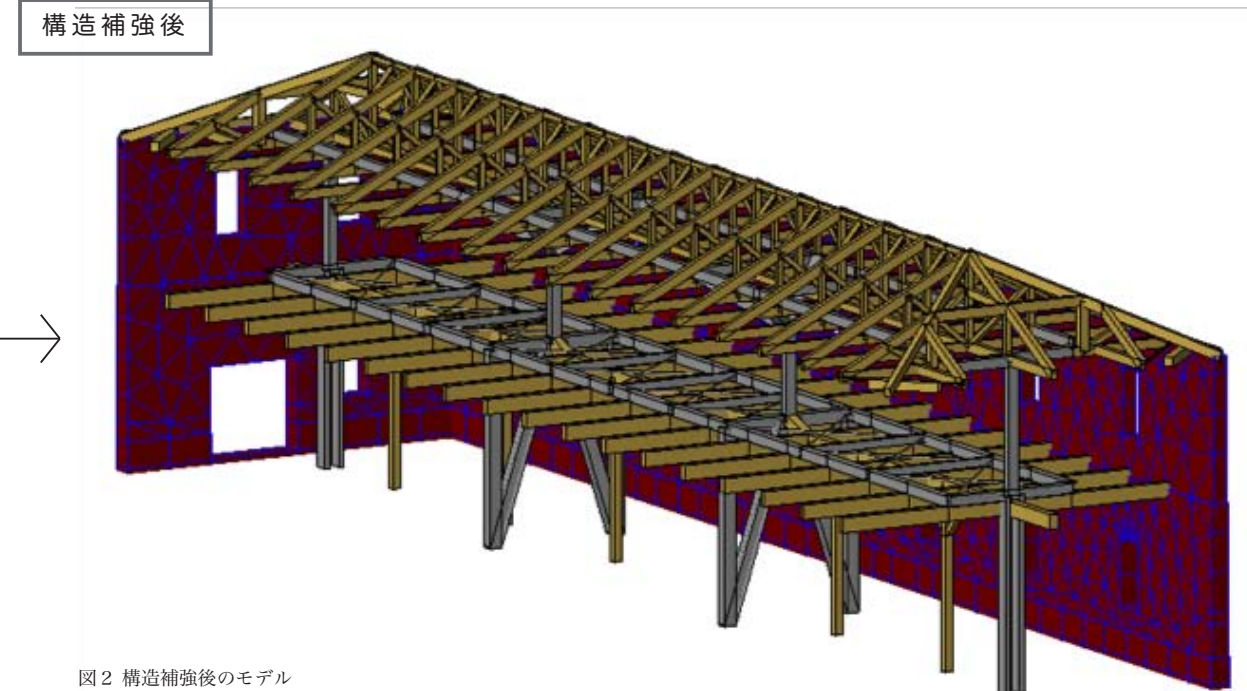


図2 構造補強後のモデル

構造補強後のイメージ



6-3. 構造補強案 (2)

構造補強システムの考案

構造補強の検討を行う上で、既存の煉瓦壁体及び、構造補強後の煉瓦壁体に対して、許容応力度計算法による構造評価を行なう。

荷重条件

構造・仕上げ自重

階	部位	材	単位重量(N/m ²)	階	鉄骨重量(kN)
RF	屋根	瓦	500	2F	78.3
		野地板	70	1F	136.1
		垂木	70		
		小屋組	325		
2F	壁	煉瓦	6350		
		野地板	125		
		根太	80		
		木造床組	215		
1F	壁・柱	煉瓦	7955		
		木造柱	25		

用途転用に伴い、長期の積載荷重を 2600N/m²として検討を行ない、広く種々の用途に用いることができるものとした。

境界条件

補強鉄骨部材の柱脚は、プレース構面における柱を固定支持、側柱をピン支持とした。

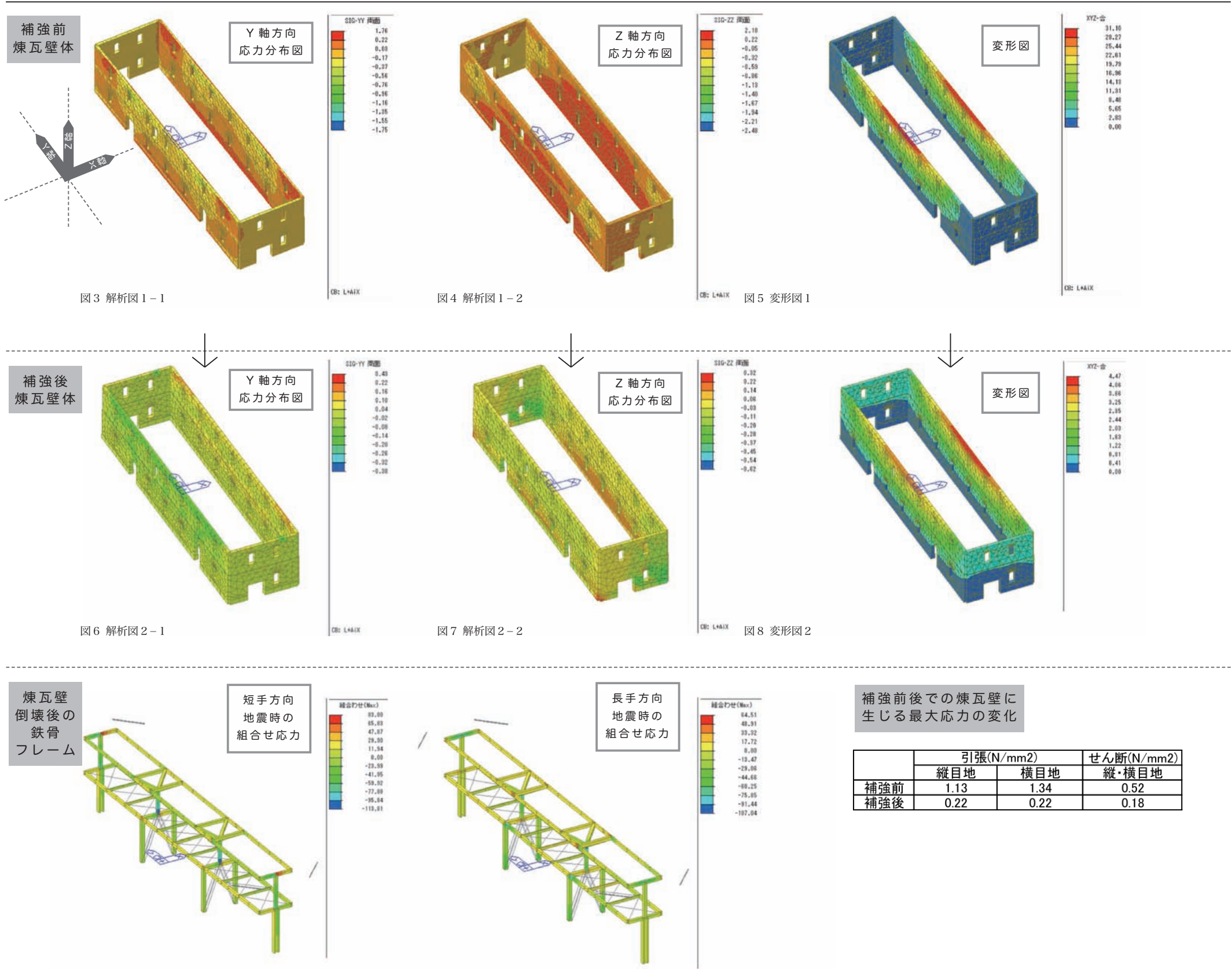
解析結果

煉瓦壁に短手方向地震力が作用した場合の補強前後の比較を行う。

補強前は許容応力度を大きく上回る結果となった長手方向の煉瓦壁の縦目地・横目地にかかる引張応力と面内せん断は、補強後には許容応力度以下となった。

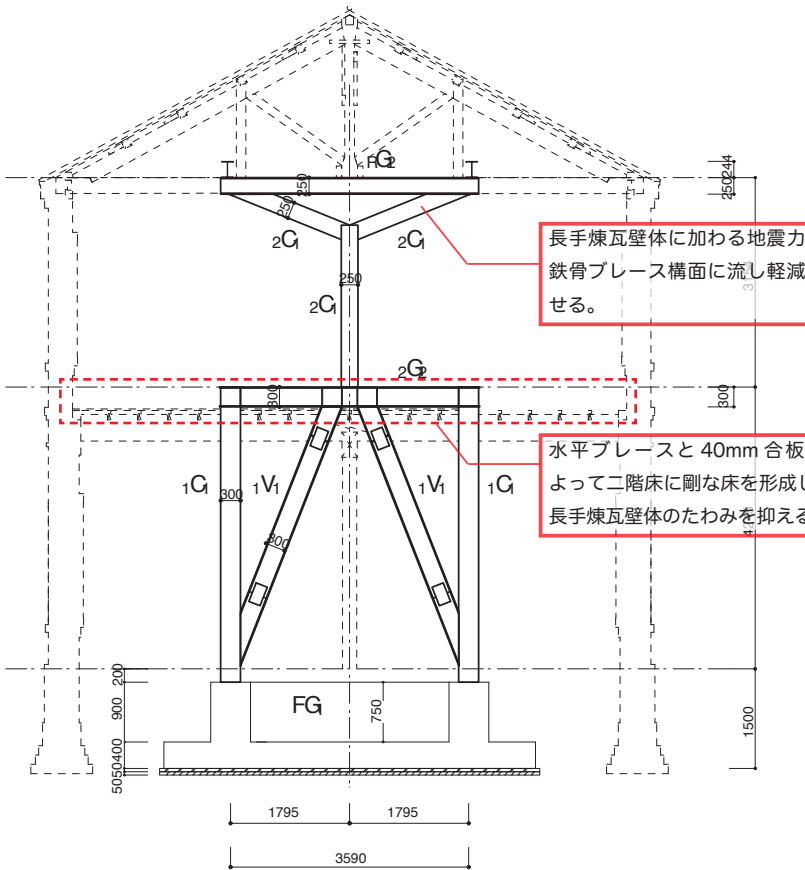
また、地震時に煉瓦壁が倒壊した場合を想定して、煉瓦壁がなく、鉄骨フレームのみで建物全体の地震力を負担することを想定したとしても、鉄骨フレームは許容応力度以下に収まり、床・屋根は倒壊しない応力となっていることを確認した。

煉瓦壁体の FEM 解析図

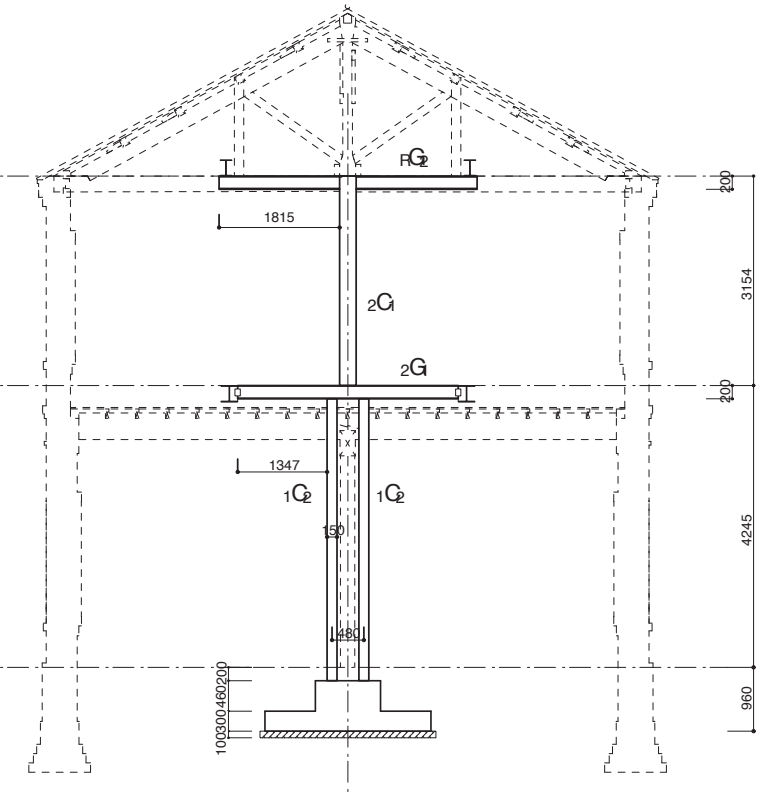


6-4. 構造補強案 (3)

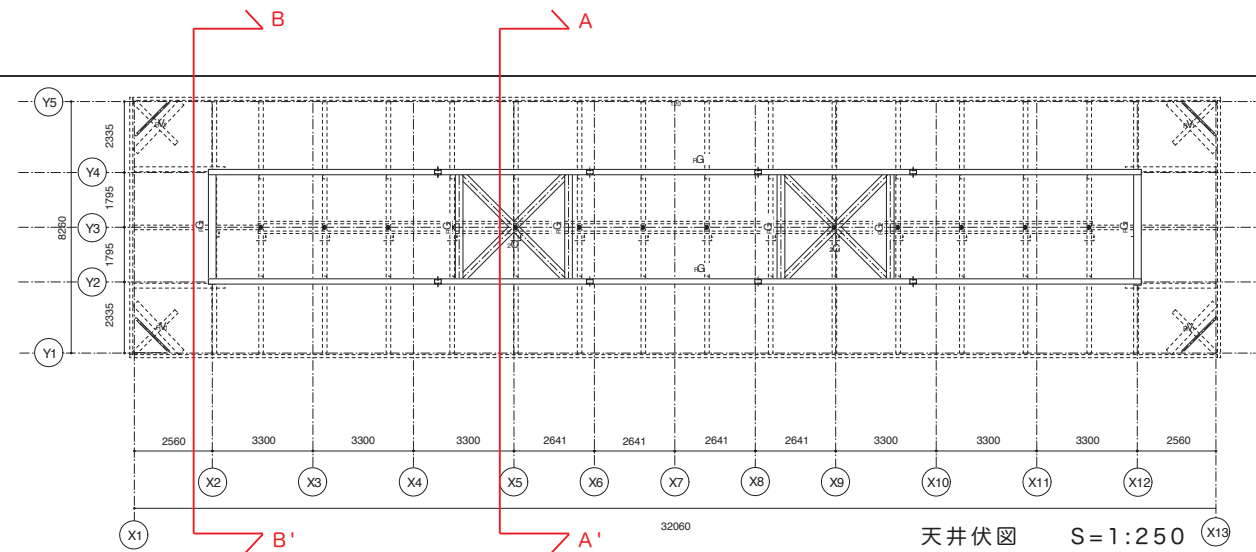
構造補強図



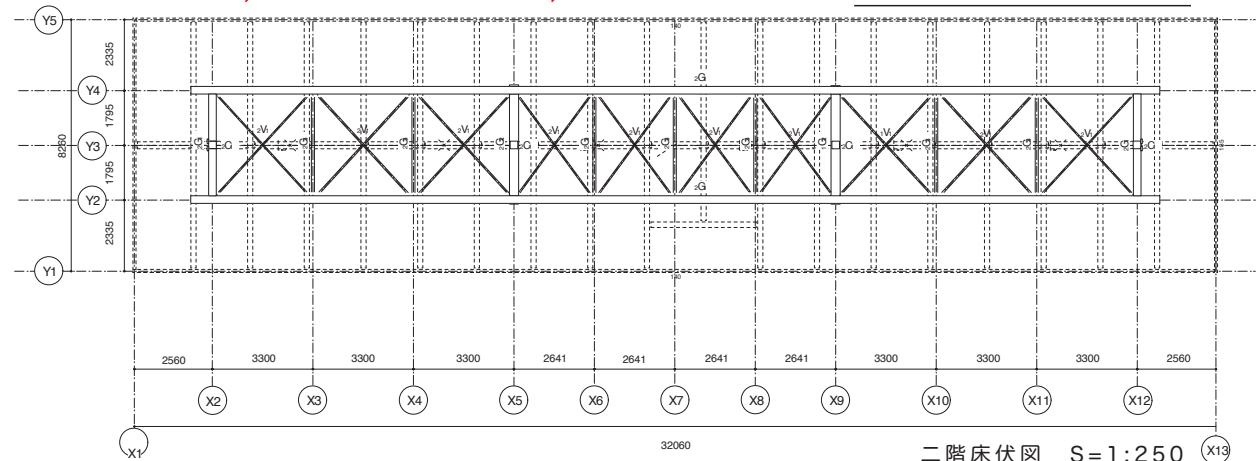
A-A' 軸組図 S=1:150



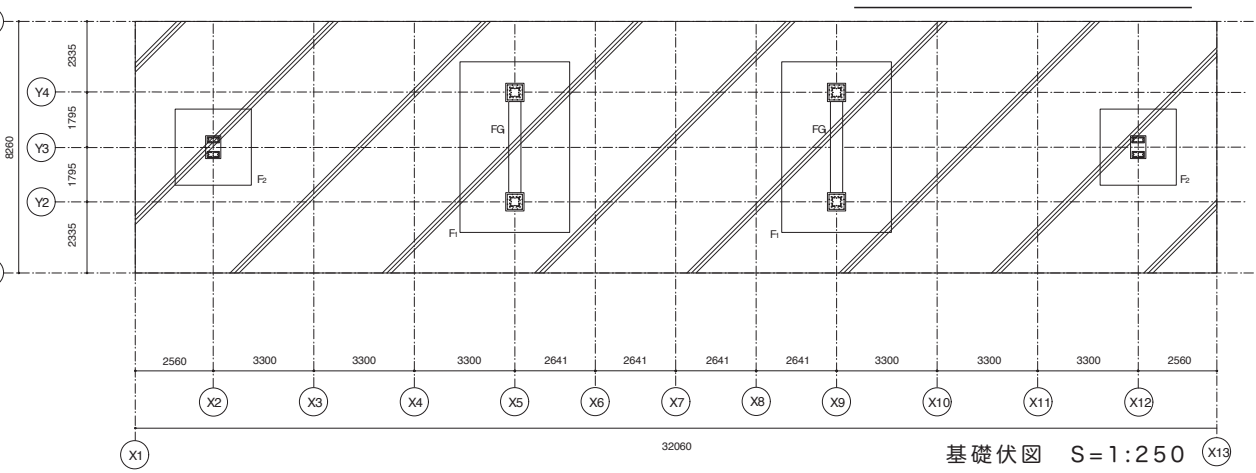
B-B' 軸組図 S=1:150



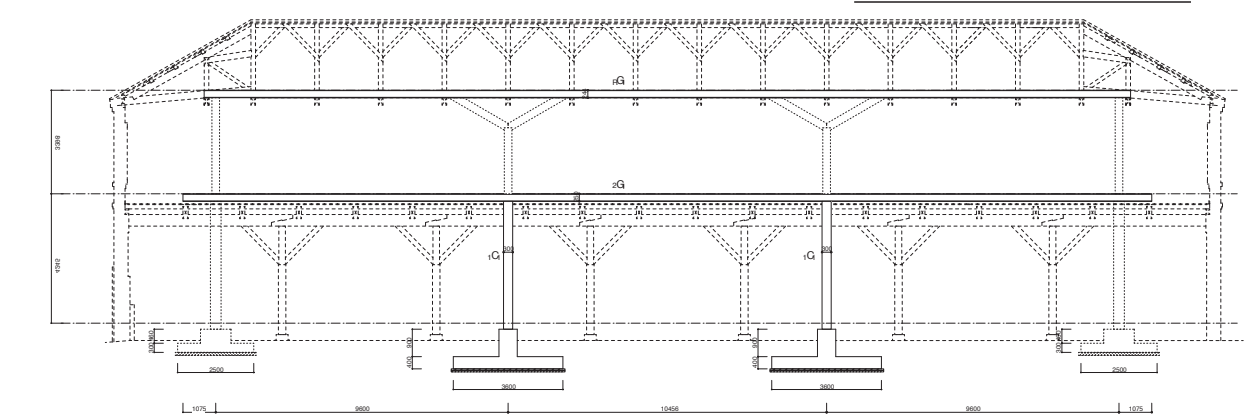
天井伏図 S=1:250



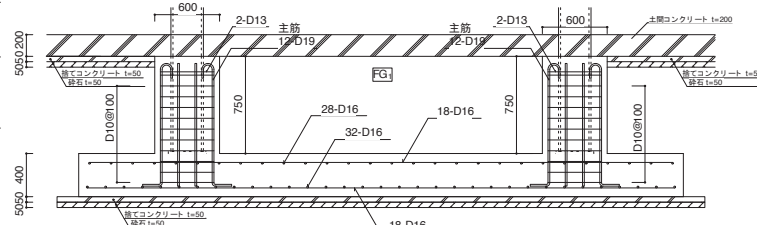
二階床伏図 S=1:250



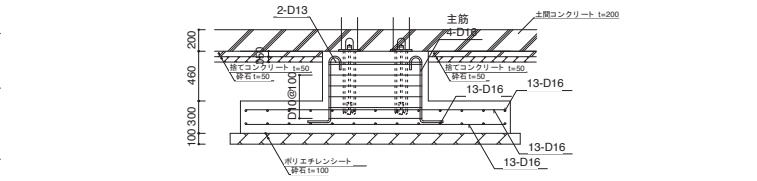
基礎伏図 S=1:250



長手軸組図 S=1:250



F₁ 柱脚部詳細図 S=1:35



F₂ 柱脚部詳細図 S=1:35

補強部材断面リスト

1G	1G	2G	1V1	2V1
□-300×300×19	□-350×150×12	□-250×250×16	FB-60730	f50
2G	2G	2G	FG	FG
H-250×250×9×14	H-300×300×10×15	H-200×100×5.5×8	H-244×175×7×11	H-250×250×9×14
FG	FG	FG	FG	FG
上端筋 2-D25	上端筋 2-D25	上端筋 2-D25	上端筋 2-D25	上端筋 2-D25
下端筋 2-D25	下端筋 2-D25	下端筋 2-D25	下端筋 2-D25	下端筋 2-D25
あばら筋 □-D13@200	あばら筋 □-D13@200	あばら筋 □-D13@200	あばら筋 □-D13@200	あばら筋 □-D13@200
750×400	750×400	750×400	750×400	750×400

6-5. 最終案イメージ図

今年度の企画設計においては、本倉庫の建築的評価をもとに保存再生活用の方針を定め、企画設計の3パターンを示した。特に保存再生活用の方針は、今後プロジェクトを進めていくうえでの共通の基盤として捉えたいと考えている。

来年度の本プロジェクトにおいては、今回定めた保存再生活用の方針をもとに、新たに付加される公共スペースの利用方針等を検討する。本倉庫が再び地域住民やまちに開かれた場となるための、更に具体的な提案を試みたい。

